

二松学舎大学大学院文学研究科・大阪大学大学院基礎工学研究科

「漱石アンドロイド」プロジェクト 2016年度 共同研究報告書



二松学舎大学
NISHOGAKUSHA UNIVERSITY



大阪大学
OSAKA UNIVERSITY

Contents 目次

04	「漱石アンドロイド」研究に寄せて 学校法人二松学舎 理事長 水戸 英則
05	アンドロイドの製作に寄せて 二松学舎大学 学長 菅原 淳子
06	漱石アンドロイドー新たな文理融合研究への期待 大阪大学大学院基礎工学研究科長 河原 源太
07	アンドロイドと人文学の可能性 二松学舎大学大学院文学研究科長 江藤 茂博
08	「漱石アンドロイド」プロジェクトに寄せて 学習院大学教授 夏目 房之介
10	夏目漱石のアンドロイド「漱石アンドロイド」作成の経緯 学校法人二松学舎 常任理事 西畑 一哉
18	漱石アンドロイドの共同研究について 大阪大学大学院基礎工学研究科教授 石黒 浩
20	作家研究の問い直し——アンドロイドによる漱石像形成過程の検証 二松学舎大学大学院文学研究科 教授 山口 直孝
22	「漱石アンドロイド」研究活動報告 二松学舎大学大学院文学研究科長 江藤 茂博
23	漱石アンドロイド研究：今後の展望 二松学舎大学文学部教授 改田 明子
24	大学マーケティング戦略としての「漱石アンドロイド」の実践的研究 二松学舎大学大学院文学研究科教授 塩沢 一平
26	日本語学的観点から見た今後の課題と展望 二松学舎大学大学院文学研究科教授 島田 泰子
28	「漱石アンドロイド」プロジェクトの今後の研究活動見込・展望について 二松学舎大学大学院文学研究科教授 瀧田 浩
30	「漱石アンドロイド」プロジェクト研究報告 二松学舎大学大学院文学研究科教授 増田 裕美子
32	今後の研究活動見込・展望について 二松学舎大学大学院文学研究科准教授 中川 桂
34	「漱石アンドロイド」プロジェクトの今後の研究活動見込・展望について 二松学舎大学大学院文学研究科准教授 松本 健太郎
36	「文学的心理学」の構築に向けて 二松学舎大学文学部専任講師 荒井 裕樹
37	漱石アンドロイドの活用について 二松学舎大学大学院文学研究科教授 田中 正樹

「漱石アンドロイド」研究に寄せて

学校法人二松学舎
理事長 水戸 英則



学校法人二松学舎では、本学創立140周年記念事業の一環として、本学卒業生であり、昨年没後100年、本年生誕150年を迎える夏目漱石先生（以下、漱石）のアンドロイドの作成を2016年6月から進めてまいりました。

本プロジェクトは、大阪大学大学院基礎工学研究科と二松学舎大学大学院文学研究科の共同研究、これは国立大学理系研究科と私立大学文系研究科とのあまり前例の無い連携事業の下、進めてまいりました。具体的には、アンドロイド研究の第一人者である石黒浩大阪大学大学院基礎工学研究科教授監修のもと、漱石のご子孫の学習院大学教授夏目房之介先生、漱石が長年勤務した朝日新聞社様、アンドロイド製作の専門会社、株式会社エーラボ様との連携・協力の下、本学大学院文学研究科の山口教授ほかの教員で構成した研究チームでアンドロイド本体の製作を行いました。

アンドロイドの外見は、大正元年、漱石45歳時撮影の写真の姿に基づき、頭部は、朝日新聞社所蔵の「デスマスク」データを、胴体、手足は、「デスマスク」のサイズを基準とし、多数の漱石の写真と比較、そのサイズを導きだした他、音声は、夏目房之介氏の声を収録、その音素を再合成して人工音声を創作、洋服は、当時のモノクロ写真を、早稲田大学理工学術院石川研究室に、AIによるカラー化を依頼、生地の色を決めました。この間、広島県安芸太田町にある加計家所有の漱石の声が録音されている「蛸管」の確認、愛知県明治村にある漱石のフロックコート、シルクハット等衣服など実地調査等学生も交えたフィールドワークも実施しました。

アンドロイドの動きは、主な動作の事前プログラミング化とそれをPCで操作する遠隔操作、朗読や講演プログラムの事前登録を再生する各操作で行っております。

今回完成した「漱石アンドロイド」は、教育現場での活用はもちろん、今後、二つの研究の基盤となるものです。一つ目は、漱石に関する新たな文学研究、人物研究です。これから講義・授業用のプログラムを開発しますが、その中で、漱石の伝記的研究（Biographical Research）すなわち漱石の容姿、表情、話し方、しぐさ等を示す証言や資料収集を行い、その結果をプログラムに取り入れ、アンドロイドに搭載し、「漱石像」を形作っていきます。また、出来上がったアンドロイドの「漱石像」と個々の漱石文学研究者が抱えている「漱石像」との相違等も研究対象として参ります。

二つ目は、人間社会におけるアンドロイドの受容性の研究です。「漱石アンドロイド」を教育現場で運用することで、その現場でどういった存在になっていくのかということを検証していきます。まずは、大学・高校・中学での講義・授業の際、受講学生・生徒に対して、詳細なアンケートを実施し、アンドロイドに対する受容性などのデータを年齢別、男女別に取り、研究に活かしていき、人間社会における受容性を研究する予定です。

今後AI技術は長足の進歩を遂げ、それを搭載したアンドロイドは益々進展して行く、その中で漱石アンドロイドも成長して行くわけで、今後漱石アンドロイドが切り開いていく様々な研究の切り口は、新たな文学研究、人間研究、教育・社会研究において無限の可能性を秘めていると言えます。

アンドロイドの製作に寄せて

二松学舎大学
学長 菅原 淳子



創立140周年を迎える二松学舎大学は、大阪大学大学院基礎工学研究科との共同プロジェクトとして漱石アンドロイドを製作致しました。夏目漱石の自伝的研究、教育現場や社会におけるアンドロイドの受容や人間とアンドロイドの共生の可能性など、今後研究が進んでいくことになります。

「座ったままで失礼します。皆さんご無沙汰ですね。ほぼ100年振りというところでしょうか。昔、『夢十夜』という小説の中で、「100年待っていてください。きっと会いに来ますから」というセリフを書いた覚えがありますが、100年待っていて頂いてありがとうございます。」

これは、昨年12月8日に本学が開いた完成記者会見で、漱石アンドロイドが行った挨拶です。翌9日はまさに夏目漱石没後100年目の命日でした。記者会見の様子は新聞やテレビ等でニュースになり、Japan Times は、「二松学舎大学が夏目漱石を特別教授として迎え入れた」と報じました。等身大に作られたアンドロイドの漱石は思ったより小柄で、握手した時に感じたしっとりとした手の感触に私は驚きました。それはまさに人間の皮膚そのものの感触でした。

アンドロイド、それは人造人間、人間そっくりな人型ロボットです。近年、日本を含めて世界ではロボットや人工知能（AI）の研究が進み、実際にAI搭載のアンドロイドも開発されています。現在ロシアで開発されているプーシキン（19世紀初頭に活躍したロシアの国民的詩人・作家）のアンドロイドは、AIによって「プーシキン流」思考の再現を目指し、プーシキンとして会話できるアンドロイドを目標にしているようです。

ロボットとは人の代わりに何らかの作業を自律的に行う装置や機械のことを言い、ロボットという言葉は、チェコスロヴァキアの作家チャペックが、1920年に『R.U.R.』という戯曲の中で生み出したとされています。ロボットの研究・開発は第二次世界大戦後には各国で進み、日本では1963年に日本初のアニメーションとしてテレビで放送された「鉄腕アトム」が、その後のロボット開発に影響を与えたと言われています。1970年代以降になると、人間の代行ができる機械が産業用ロボットと呼ばれて、様々な分野で実用化されてきました。その後、製造機械で据え置き型であった産業用ロボットも高度な遠隔操作や自動制御装置の導入が進み、危険な場所や水中の探査など、今日では移動するロボットが出現しています。さらにASIMO等の二足歩行が可能な人型ロボットや、AIBOのような犬型ロボットが開発され、家庭用ロボット、介護やサービス用ロボットなどの開発で、今やロボットは社会に普及し始めています。

漱石アンドロイドにはAIは組み込まれてはいませんが、今日AIの研究も飛躍的に進み、深層学習（ディープラーニング）という新たな技術により、AIは膨大なデータを解析することで自ら「学習」を深められるようになったのです。囲碁や将棋の王者に勝ち越したり、小説を書くレベルまでに進化しています。「人の知を超える『超知性』の可能性が見えてきた」と危惧する科学者もあり、今後AIが進化すれば、現在の仕事の多くが数十年後には消える可能性があるとも言われています。

このような研究・開発の状況の中で、アンドロイドはどのような役割を果たすのでしょうか。漱石アンドロイドの製作を監修された大阪大学の石黒浩教授は、「人間に近づけようとしても人間にはなれない。では人間とは何か？アンドロイドを研究することで人間とは何なのか、追究することになる」とおっしゃっています。逆説的ですが、私達人間は人間にしかない創造力や他人と協働していく力を、育てていくことが求められているのではないのでしょうか。

漱石アンドロイド ー新たな文理融合研究への期待

大阪大学大学院
基礎工学研究科長 河原 源太



この度は、二松学舎の先生方が同学舎創立140周年記念事業の一環として、同学卒業生である文豪夏目漱石のアンドロイドを製作されたとのお知らせを大変うれしくかつ興味深く伺いました。この漱石アンドロイドは今後教育現場で活用されるとともに、人とアンドロイドとの交流を通して、漱石に関する新たな文学研究、人物研究に資するデータが収集される予定であるとお聞きしています。また、人間社会におけるアンドロイドの受容性も研究される予定です。

この独創的な漱石アンドロイドプロジェクトは、漱石のご子孫である学習院大学夏目房之介教授のご協力を得て、二松学舎大学大学院文学研究科と大阪大学大学院基礎工学研究科石黒浩教授との共同研究として実施されたものです。石黒教授のアンドロイド研究の目標のひとつは、人をアンドロイドとして再現する過程で、人とは何か?という根源的な問いに対する答えを見出すことであると思います。アンドロイドの研究は理工系の対象と思われがちですが、実はそれは人の理解という人文社会系の研究とも密接に関連しており、文理融合研究の典型例であると言えます。今回の漱石アンドロイドプロジェクトは、アンドロイドに関する文理融合研究に、文学や教育と言った新たな視点を付与する斬新な試みであると思います。

大阪大学基礎工学部、大学院基礎工学研究科は、「科学と技術の融合による科学技術の根本的な開発 それにより人類の真の文化を創造する学部」を創設理念として掲げ、1961年の創立以来、旧来の縦割りの学問体系には縛られず、理学と工学との融合領域における教育研究を精力的に推し進めてきました。最近では、新しい理念や方向性についても議論がなされており、理学と工学の学際領域に留まらず、人文社会系あるいは医歯薬系と理学、工学との境界分野にまで教育研究活動の場を拡張し、複合学際領域の開拓あるいは新学術領域の創成を目指した活動を展開しています。なかでも文理融合は本学部、研究科における今後の研究活動の重要分野と位置付けられています。現在、石黒教授のアンドロイド研究に加え、データ科学や数理ファイナンスと言った文理融合研究を推進しています。今回の二松学舎の先生方と石黒教授の漱石アンドロイドプロジェクトは、本学部、研究科としてもこれまでにない新たな文理融合研究として大変注目しており、今後の共同研究の展開に大いに期待しています。

アンドロイドと人文学の可能性

二松学舎大学大学院
文学研究科長 江藤 茂博



2016年、大阪大学大学院基礎工学研究科と二松学舎大学大学院文学研究科との間で学術共同研究に関する協定書に調印がなされ、漱石アンドロイドが制作されるに至りました。ここに、石黒浩教授のアンドロイド研究に導かれて本学文学部及び大学院文学研究科は文理融合型の研究に向かうことになったのです。こうした機会を持つことができたこと、まずは両大学の関係者の皆様のご尽力に感謝申し上げます。また、夏目房之介学習院大学教授には、本学漢学塾時代ゆかりの漱石に関する研究調査への格別のご配慮とご協力を承りましたこと、感謝申し上げたいと思います。

大阪大学大学院基礎工学研究科は、元大阪大学総長であり初代学部長正田建次郎博士の創設理念として「科学と技術の融合」をお持ちであると聞き及んでおります。また、近年は文理融合の分野にも積極的に取り組まれていて、その教育研究の成果として多くの先端学際領域の創生を重ねられておられます。学問世界に新領域を切り開き、正田建次郎博士の理念である「人類の真の文化」の「創造」に常に取り組まれている世界的な教育研究機関であることは、すでに多くの人が知るところです。

本学文学部及び大学院文学研究科は、1877年の学祖三島中洲による漢学塾創立以来、旧制の国漢専門学校を経て新制大学文学部の現在まで、文学の教育研究を長年重ねてまいりました。社会との接点も、中等学校教員や研究者の育成という人文学系高等教育機関としての使命を果たしてまいりましたが、昨今の社会的要請のなか、本学の教育研究を社会に向けて発信するだけでなく、東アジアの諸大学院を始めとする世界各国の大学（大学院）との共同教育研究提携や国内社会科学系学部との学際研究提携などのさまざまな学術交流のなかで、社会的発信と研究の深化を行ってまいりました。

今回、本学大学院文学研究科は、大阪大学大学院基礎工学研究科の理念と結びつくことで、初めての文理融合による教育研究の道を開くことができ、その期待と責任を、私ども教育研究スタッフは大きく受けとめております。これまで積み重ねられてきた文学研究をアンドロイドというあり方に集約させること、さらにそうしたあり方で社会に発信すること、その両者による新しい知の生成に、大きな期待を寄せている次第です。

最後に私事ではございますが、大阪大学基礎工学部初代学部長正田建次郎博士は、晩年に東京の私大の学長を務められておられました。そこに在籍していた学部学生の私は、キャンパスで八ミリ映画を撮影していた時に、先生と言葉を交わしたことがございました。どんな作品を制作しているのか、とても興味をお持ちのご様子がいまでも印象に残っております。今回の学術交流のご縁をいただけたことは、長い時間を経て正田先生と再会できたような喜びを持ちましたことも書き添えさせていただきます。

「漱石アンドロイド」 プロジェクトに寄せて

学習院大学
教授 夏目 房之介



2016年4月5日に二松学舎側と面談し、漱石アンドロイド・プロジェクトへの参加を、その場で応諾した。理由は単純で、アンドロイド製作をロボット工学の石黒浩大阪大学教授が担当すると聞いたからであった。

石黒教授は、テレビ番組「マツコとマツコ」(2015年4月4日～9月26日 日本テレビ系列)で見知っており、この番組における「マツコロイド」(タレントのマツコデラックスのアンドロイド)の応用実験は、地上波民放の人気娯楽番組でありながら、きわめて知的な刺激に満ちたものであった。

「ロボット」という存在は、自動車工場の自動組み立て装置から人型の自動人形まで様々なありようがある。日本では戦後マンガやテレビアニメにおいて広く扱われたため、アトムのような小型の人型ロボットやガンダムのような人間の乗る操縦型巨大ロボットなど、人型ロボットを一般に想起しやすい。また、コンピューターの発達による「人工知能」のイメージとも重なり、実際の機械的物質性とイメージの広がりの方が複雑に入り組んで存在しているといえる。

また、ロボットという存在をどのように定義すべきかは、そのまま「人間」や「生命」をどう定義するかという哲学的な領域に直結し、仮説的な理論検証につながる。

ロボットの問題系のひとつに「不気味の谷仮説」というものがあつた。ヒューマノイドを人間に近づけるほど人は不気味さを感じてしまう、という仮説である。

この仮説自体は、実証されていなかったものの、直観的にそうであろうと思わせる感覚があつた。日本の小型人型ロボットはいずれも抽象的で記号的な顔の造形を取り、写実的に人間に似せることを避けていた。また、一時期までのゲームなどのCGアニメもたしかに「不気味」に感じられた。日本の戦後サブカルチャー史に大きな影響を与えているアトムのロボット記号への親近感は、「ロボット」といえば「かわいい」ものという連想を呼び、実際のロボットにもその記号的なイメージが投影されているように思われた。それらのことは不気味の谷仮説を証明しているかのように思われたし、事実私もこの仮説を信じていたのである。

が、本物に出来得る限り近づけようとしたマツコロイドのさまざまな実験は、少なくともその生々しい「不気味さ」が、きわめて容易に「親近感」へと乗り越えられてしまうものでもあることを示していた。私にとって、このテレビ番組の最初の衝撃は「不気味の谷仮説が吹き飛んだ」というものであつた。そのことは、石黒教授に関するドキュメンタリー(「情熱大陸」であつた記憶があるが未確認)で見たほかのアンドロイドなどでも共通しており、そもそも石黒教授の研究そのものが、そうしたいわば認識論的仮説検証への志向を持っているように思えた。

ロボット研究への根本的な動機について、石黒教授は著書で以下のようなエピソードを語っている。

母親が言うには、僕は、人の言うことを聞かない子どもだったらしい。[略]

小学校五年のときに、親だったか先生だったか、大人から「人の気持ちを考えなさい」と叱られた。僕はこの言葉に衝撃を受けた。[略]

これはいったいどういうことなのか？ 僕にはわからなかった。[略]

みなさんは「気持ち」とは何か、「考える」とは何かを説明できるだろうか？

石黒浩『アンドロイドは人間になれるか』文春新書 2015年 p.9～10

毎日絵や日記をかくというアウトプットをひたすら繰り返す子どもだった石黒少年は、このときに抱いた疑問をその後「大

人たち」に問い続け、結局大人は何もわかっていないのだと結論づける。そして、やがてロボット工学への興味が、その疑問と結びついてゆくのだと語る。幼少期の彼にとってはアウトプットだけが問題であって、その先に他者が存在していなかったようなのだ。したがって、アウトプットのしかたによって他者に影響があり、場合によってそれがネガティブでありうるという想像ができなかったかのようだ。

石黒教授の心理分析をするつもりも余裕もないので、ここでは話を私自身に引き寄せるが、私にも似たような感覚があった。石黒教授ほど極端ではなく、むしろ他人という存在に敏感過ぎる面をもちつつ、しかし一方でひどく鈍感な自分に気づいてゆく過程が私の大人になる過程だったといってもよい。また私は19歳のときに不安神経症の被害妄想を発症した。軽度なものだったのでそれが妄想幻覚であるとの自覚があり、自分だけで症状をリカバーしてきた。その回復の契機になった認識は以下のようなものだった。

人間の意識とは、瞬間的に明滅するストロボのような現象で、本当はそこに意識のない断絶が存在する。しかも世界や他人との間でその都度生じる表層的なものにすぎない。「本当の自分」と自分で感じているものも、他人がとらえる自分の像と同等に、関係のはざまで生じた視線の衝突の意識のようなものだ。比喩的にいえば人間は、瞬間の点の集合としての、ゆがんだ水晶体のようなもので、その中心（本質）は空っぽである。「この人はこうだ」とか「自分はこうだ」という直感的確信は、瞬間的な現象を時間化して作りあげた記憶の像であり、相手によって、時期によって、関係性によってそのつど異なるほかないものである。

多少、高校の時読んだ仏教思想の影響はあるが、この認識はごく素朴なものだった。コミュニケーションに関して何らかの障害をもった人間にとって、この種の認識は必然性があるのかもしれない。のちに現象学や現代思想、プラグマティズムにも似た感覚があることを知るが、それは数十年たってからの話だ。

石黒教授の開発しているアンドロイドによる検証には、そもそも人間の認識を関係の中にみようとする志向があると感じていた。対談（2016年6月7日於二松学舎 7月15日朝日新聞掲載、デジタル版全文）をさせていただいたときも、その点を確認したつもりである。対談でも、いささか舌足らずながら、上記のような私の認識を語らせてもらったが、石黒教授からは共感を得られたように思う。

その後、当初は恐る恐る私の反応を探っていた二松学舎スタッフも次第に慣れてきて、私は漱石アンドロイドの「声優」役を拝命する。元来好奇心が強いので、漱石そっくりのアンドロイドが自分の声で話し、それが現代の「漱石」像として共有されることで何が起きるのか、きわめて興味深かった。まず相互に関連のない短い文節を数百単位で読み上げ、その録音から、漱石の音声として再合成するための音素を抽出する録音作業が2回（2016年6月8日、14日）、『坊っちゃん』冒頭部分、『夢十夜』第一夜、講演「私の個人主義」などを朗読し、そのまま再生するための録音を2回（2016年9月21日、10月26日）行った（漱石発言の一部原稿は二松学舎大学の先生が創作されたものである）。

漱石という文化的共有財産について、子孫が過剰な権利主張をし、その社会的共有と再創作をさまたげるべきではないというのが私の年来の主張であるが、今後このアンドロイドの「漱石像」が共有されてゆくににつれ、私の声はある意味で「私の声」ではなくなり、私の死後にはまったく「漱石の声」として認識されてしまう可能性だってある。

10～20代には、「漱石の孫」としての周囲の反応に激烈な拒否反応とストレスを感じており、それによって思春期以降の人格形成を行わざるをえなかった自分が、その経緯もあって獲得した人間の認識に関する仮説を、漱石アンドロイドという実在する認識検証装置によって実験されるという経験は、考えてみれば稀有である。

何度でも強調しておきたいのは、このたびの漱石アンドロイドの実験は、アンドロイド本体の完成から始まるという点であって、今後さまざまな試行錯誤が行われ、そのフィードバックによって実験が初めて遂行されるものだということである。それがどのくらい持続するのか、現時点では不明である。

夏目漱石のアンドロイド 「漱石アンドロイド」作成の経緯

学校法人二松学舎
常任理事 西畑 一哉



<要旨>

二松学舎大学大学院文学研究科と国立大学法人大阪大学大学院基礎工学研究科（石黒研究室）は、共同研究として、夏目漱石（以下、漱石）のアンドロイド「漱石アンドロイド」を製作し、「教育現場にかかわる人間型ロボットの創成と活用に関する研究」を開始した。

アンドロイドが、授業や講義を行うという試みは日本初のことであり、誰もまだ経験したことのない教育をめぐる実験と言える。多くの日本人に、文豪として広く知られている漱石が、人間に限りなく近い形のアンドロイドとして姿を現し、漱石作品の朗読や講演を行うことにより、教育現場においてどのような効果をもたらすのか、さまざまな教育現場での活用を通じて、検証していく考えである。

「漱石アンドロイド」本体は、石黒浩大阪大学大学院基礎工学研究科教授監修のもと、二松学舎大学大学院文学研究科の教員で構成された研究チームが、多くの人にとって馴染み深い、旧千円札に描かれた漱石（45歳頃）をモデルに、伝記的・身体的調査を実施し製作した。

今後は、完成した「漱石アンドロイド」に搭載するソフトウェア（授業・講義用プログラム）を開発する中で、漱石文学や漱石の話し方の特徴や動作などの研究を深め、「漱石像」を実際に形作る、という新しい文学研究を進めていく考えである。また、教育現場で運用していく中で、「アンドロイド」が社会にどう受け入れられ、どのような存在になっていくのかということを検証し、未来のアンドロイドの活用に関する研究を行っていく計画である。

1. 研究の契機

二松学舎では、2016年6月、創立140周年記念事業として、二松学舎の卒業生であり、2016年に没後100年、2017年に生誕150年を迎える夏目漱石を、アンドロイドとして甦らせる「漱石アンドロイドプロジェクト」を立ち上げた。

→二松学舎は、2017年10月に創立140周年を迎える。常任理事の西畑が140周年記念式典において記念講演を行う講演者の人選を命ぜられた。西畑は、二松学舎の卒業生であり、本学が教育目標に掲げる「国語力」の象徴として夏目漱石を想起し、アンドロイドの姿であれば、復活してもらうことができるのではないかと考え、大阪大学大学院基礎工学研究科の石黒浩教授に打診、同時にデスマスク・写真等多くの資料を保持する朝日新聞社に協力を要請した（2016年1月）。

夏目漱石の孫である夏目房之介氏には、アンドロイド作成の許諾を得るとともにアンドロイドの音声を作成するために不可欠な「音素登録」の協力を依頼し、承諾を受けた（2016年4月5日）。

なお、夏目漱石の孫の一人である、半藤末利子氏を訪ね、アンドロイド作成の許諾を得た（2016年6月3日）。

2. 二松学舎学内における主な意思決定スケジュール

2016年2月15日 二松学舎全学政策会議（理事長・学長ほか教学サイド・法人サイドの部長以上のメンバーで構成）で、140周年記念事業の一環として「漱石アンドロイド」の作成と研究を進める方針であることを説明（西畑）、了承された。大阪大学大学院基礎工学研究科並びに朝日新聞社と、二松学舎大学大学院文学研究科との間で学術共同研究に関する協定書を締結する必要がある旨についても西畑から報告し、了承を得た。

2016年5月24日理事会で、創立140周年記念事業の一環として「漱石アンドロイド」の作成及び研究を進める旨、並びに二松学舎大学大学院文学研究科と朝日新聞社との間で共同研究に関する協定書を締結する旨の決議を得た。

2016年7月26日理事会で、二松学舎大学大学院文学研究科と大阪大学大学院基礎工学研究科との間で共同研究に関する協定書を締結する旨の決議を得た。

→一連の会議決定により、学長のリーダーシップの下で漱石アンドロイド研究を実施する体制が整えられた。

3. 漱石アンドロイド作成発表の記者会見

2016年6月7日、二松学舎において、漱石アンドロイド作成発表の記者会見を行った。記者会見には二松学舎理事長水戸英則、二松学舎大学学長菅原淳子以下二松学舎関係者のほか、漱石アンドロイドの監修者である大阪大学大学院基礎工学研究科の石黒浩教授、夏目漱石の孫で、音素登録を依頼した夏目房之介氏も参加した。



作成発表記者会見時の模様



石黒浩教授（左）

記者会見時には、「漱石アンドロイド」を製作することで、大学や高校、中学などの教育現場でアンドロイドを活用しながら、文学研究の新たな領域へのアプローチ方法を探るとともに、人間社会でのアンドロイドの受容性を研究することを目的とする旨が強調された。

4. 夏目漱石と二松学舎の関わり

二松学舎は、1877年（明治10年）“漢学塾二松學舎”として、九段の地に創立された。創立者の三島中洲は、当時著名な漢学者であった。

漱石は、著作物からもうかがえるように、年少期から漢詩や漢文に惹かれた少年であった。ただ、当時目指していた東京大学予備門入学には英語を学ぶことは不可欠であった。実は、あまり英語が好きではなかった当時の少年漱石は、自分の進むべき将来と葛藤しながらも、1881年（明治14年）、“漢学塾二松學舎”の門をたたき、約1年三島中洲のもとで漢詩文（論語、唐詩等）を学んでいる。

明治39年に発表された「落第」という談話の中で、漱石は、当時のことを「机もない古い畳の上で、カルタ取りの時のような姿勢で勉強した」「輪講の順番を決めるくじも漢学流で、何事も徹底して漢学式だった」などと、回想している。英語教員、英文学研究者として世に出た漱石は、作家になる前から、俳句や漢詩を作り、禅の修行をし、東洋的な境地を



創立者：三島中洲



明治30年代の塾舎

理想としていた。「東洋と西洋」は漱石が生涯をかけて考え続けたテーマだったと言える。そう考えてみれば、“漢学塾二松學舎”で学んだ一年は、漱石の生涯の中でも独特の意味合いをもつ一年だと考えることができる。

→漱石が“漢学塾二松學舎”において終えているのは以下の課程。当時としてハイスピードの進級であり、優秀な学生であったことがうかがえる。

1881年（明治14年）7月 第三級第一課（唐詩選、皇朝詩略、古文真宝等）

1881年（明治14年）11月 第二級第三課（孟子、史記、文章軌範、三体詩、論語等）

5. 漱石アンドロイド製作過程

「漱石アンドロイド」の製作は、共同研究者で、アンドロイド研究の第一人者である石黒浩大阪大学大学院基礎工学研究科教授監修のもと、漱石の子孫（孫）の夏目房之介氏と朝日新聞社の協力を得、二松学舎大学大学院文学研究科の教員および職員で構成した研究チームで実施した。

（1）漱石アンドロイドの外形

アンドロイドの外見は、大正元年、漱石が45歳の頃に撮影された写真の姿に基づき、立体的な頭部製作には、朝日新聞社所蔵の「デスマスク」を3Dスキャンして得られたデータを使用した。

→デスマスクは元々遺族宅等にも保存されていたが、太平洋戦争の空襲等で失われ、現在朝日新聞大阪本社に保存されているものが残存する唯一のものである。朝日新聞社の許諾を受け、レーザーによる3Dスキャンを行った（2017年6月6日）。



デスマスクの3Dスキャン

右記写真が目標とした45歳頃の漱石の写真であり、旧千円札のモデルとなったものである。この写真の漱石が巷間最も親しまれていることが、目標とした理由である。

もともと、旧千円札の肖像は、元来「偽札と真券を区分しやすくする」との趣旨からかなりデフォルメされていることが今回の製作過程であらためて認められた。また、上記写真そのものにも漱石の顔の特徴である「顔の痘痕」は確認できず、何らかの修正がほどこされている可能性が高いことも確認できた。

アンドロイドの頭部・顔面部原型については、デスマスクを基盤に作成したが、7月28日の頭部検収時には、アンドロイドの鼻が、かなり高い鷲鼻であることが、議論的になった。

石黒教授、夏目房之介氏と二松学舎教授陣との議論の上、デスマスクの基盤を信頼する方向で判断した。

→夏目漱石が当時の日本人としては特異なほど西洋的な顔立ちをしていることがあらためて確認できた。



胴体部分や手足部分については、「デスマスク」のサイズを基準とし、アンドロイド製作の目標年齢に近い漱石の写真数枚と比較し、顔のサイズの比率から各部位のサイズを導きだした。

また、「東北大学デジタルコレクション漱石文庫データベース」で公開されている身体検査のデータ資料も参考にした。



夏目房之介氏

(2) 漱石アンドロイドの音声

漱石アンドロイドの音声については、企画当初からアンドロイド作成の最大の難関であると考えられていた。漱石の声を録音した「蝋管」が存在することは知られているが、同時に蝋管の再生が難しいことも各種報告書から知られていたためである（後述）。

音声は、夏目房之介氏の声を収録（約10時間）し、録音した声を音素に分解したうえで、再合成して人工音声を創作することとした。

音声学的には、人間の声は背格好等の体格によってほぼ規定されると言われている。漱石とその孫である夏目房之介氏は背格好がかなり似かよっていることもあって（夏目漱石の身長は159cm夏目房之介氏の身長は161cm）、漱石アンドロイドの声の音素登録を夏目房之介氏に依頼したものである。

また、夏目房之介氏と房之介氏の父親で漱石の長男である夏目純一氏の声は電話口で良く間違えられるほどそっくりであったとのことであり、加えて、「あくまで伝聞であるが、親戚筋によると、夏目漱石とその長男の夏目純一の声も似ていた」（夏目房之介氏）ということも夏目房之介氏に音素登録を依頼した理由の一つである。

(3) 漱石アンドロイドの衣服等

漱石アンドロイドの衣服については、当時の写真と文献資料から考察を進める一方、早稲田大学理工学術院石川研究室（石川博教授、飯塚里志研究院助教、シモセラ・エドガー研究院助教）に、AIによるモノクロ写真のカラー化を依頼、その画像を基に生地の色を決定した。

製作は、NHKの時代物（含む明治大正期）のドラマなどで衣裳制作を担当している「東京衣裳」に依頼した。

→なお「東京衣裳」のデザイナーによると、下記のカラー化した画像で漱石が着ている「白いベスト」は「大正初期には日本で製作されていないはずなので、おそらく輸入品か、漱石自身がロンドンで求めたものではないか」とのことであった。

靴は、明治5年創業の「大塚製靴」に依頼し、残存する漱石の靴を履いた写真を参考にしつつ、大塚製靴の所有する明治・大正時代の靴の資料（パンフレット）を参考に、大正初期に流行していたデザインに近いものを選定した。



カラー化した画像



製作した衣装



靴（大塚製靴）

（４）漱石の音声等の探索とフィールドワーク

今回、漱石の身体的特徴や足跡を辿る調査として、広島県安芸太田町にある旧家「加計家」を、学生とともに訪れ、漱石の声が録音されている「蝋管」を確認した（2016年11月4日）。

加計家の現当主第25代加計康晴氏から、曾祖父に当たる加計正文氏と漱石の声を録音した蝋管について丁寧な説明を受けた。

→加計正文氏は、東京帝国大学で漱石に学んだが、加計家を継ぐため広島に帰ることになった。その後、尊敬する漱石の声を残したいという思いから、1905年（明治38年）、当時千駄木に住んでいた漱石の自宅を訪ね、銀座で購入したエジソン型蓄音器に漱石に声を吹き込んでもらい、広島に持ち帰ったとのことである。

広島を訪れる前には、この「蝋管」の再生を試みたことがある元千葉工業大学教授の鈴木英男氏を二松学舎大学に招き、「蝋管」に関する勉強会も行った（2016年9月23日）。

→鈴木英男元教授からは、蝋管の側溝の部分を含め、残念ながら漱石の音声の痕跡を発見することは出来なかったとの説明を受けた。

愛知県の「博物館明治村」にも学生とともに訪れ、漱石が当時着ていた洋服などの実物に触れるというフィールドワークを実施した（2016年11月5日）。

→漱石のフロックコートは女性用のマネキンに着せられており、肩が細く、極めて痩身であったことをうかがわせるものであった。

なお、フィールドワークに参加した学生4名はいずれも漱石研究を中心に行っている文学部国文学科の2つのゼミ生であったが、「漱石のリアルな足跡に触れ、漱石研究に一層熱が入った」とのことである。



蝋管（実物）



蝋管の勉強会



明治村（漱石のフロックコート）

（５）漱石アンドロイドの駆動部作成

アンドロイド本体及び駆動部は、株式会社エーラボが製作を担当した。皮膚は株式会社エーラボオリジナルリアルスキンを採用し、44か所に空気圧アクチュエーターを埋め込むことで、首や両腕が稼働し、表情を変えることができる動作仕様とした。

アンドロイドの制御（動き）は、主だった動作を事前にプログラムし、タッチパネル式のPCで操作する「リアルタイム」の遠隔操作と朗読や講演プログラムを事前に登録し「再生する」操作で行うこととした。

<仕様>

高さ：130センチメートル（座位モデル／立位での使用は想定しない）

※実際の漱石の身長は159cm

動作箇所：44か所（頭部動作13か所、頸部動作3か所、左手腕部動作12か所、右手腕部動作12か所、胴体部動作4か所）※片目に眼球カメラを搭載。

アクチュエーター：空気圧アクチュエーター

皮膚素材：株式会社エーラボオリジナルシリコン樹脂

頭髮素材：人毛髪、一部植毛

6. 漱石アンドロイド完成披露記者発表

2016年12月8日漱石アンドロイドの完成披露記者発表を実施した。

記者発表における主な公表文は以下の通りである。



漱石アンドロイド完成画像

今回完成した「漱石アンドロイド」は、教育現場での活用はもちろん、今後、二つの研究の基盤となるものです。一つ目は、新たな文学研究、人物研究です。これから講義・授業用のプログラムを開発していきますが、その開発過程の中で、漱石文学や漱石の話し方の特徴や動きなどの研究を深め、プログラムに取り入れ、搭載することで、一つの焦点としての「漱石像」を探求し、形作っていきたいと考えています。また、この「漱石アンドロイド」が一つの触媒となり、個々の漱石文学研究者が抱えている「漱石像」との距離感や違和感、相違等を探り、具体化することも研究対象として参ります。

二つ目は、人間社会におけるアンドロイドの受容性の研究です。10～15年後には、AI（人工知能）やアンドロイドが日常的に入り込んでくる社会が訪れます。「人間に受け入れられやすいAIやアンドロイド」とは何かを探りながら、「漱石アンドロイド」を教育現場で運用することで、「漱石アンドロイド」が社会にどう受け入れられ、どういった存在になっていくのかということを検証していきます。まずは、大学・高校・中学での講義・授業の際、受講学生・生徒に対して、詳細なアンケートを実施し、アンドロイドに対する受容性などのデータを年齢別、男女別に取り、研究に活かしていく予定です。

また、スマートフォンがこの10年足らずで、世界を席卷したように、AI搭載機器の増大も身近に迫っている旨を強調した。

→スマートフォンはアップル製の「iPhone」1号機が2007年1月に発売されたが、9年後の2016年には、年間販売台数が概ね15億台、保有台数も20億台をかなり超えていると思われる。

→AI搭載ロボット掃除機「ルンバ」はMITのブルックス人工知能研究所長が基本設計した。近年は、一般家庭向きの商品が開発され、多くの人に支持されている。

7. アンドロイドに対する人間の受容性について

完成披露記者発表に先立ち、テストを兼ねて、漱石アンドロイドによる模擬授業を、高校生・中学生に対して実施した（2016年11月24日）。

→二松学舎大学附属高校、二松学舎大学附属柏中学校・高校の計116名に対して実施した。

→プログラムは、漱石アンドロイドによる「自己紹介」と「夢十夜の朗読・解説」のセットで行った。

その際、漱石アンドロイドに対するイメージを調査する目的で、授業後に詳細なアンケートを実施した（アンドロイドに対する人間の受容性調査の端緒）。

その結果、授業を受ける前に感じた違和感が授業を終えた後にどの程度減少しているかという質問に関し、男女学生間で、顕著な差がみられた。すなわち、「違和感が残っているが、最初より少なくなった」「最初に感じた違和感が講演後はなくなった」との回答が、女子が男子を有意に上回った（下記参照）。

「女性の方がアンドロイドに対する受容性が高い」ともとれる結果だが、120名足らずのサンプル数での結果であり、アンケート内容の再構成を含め、今後の研究課題としたい。

問12 「漱石アンドロイド」の講演を聞き終えて、最初に感じた違和感は今も残っていますか？または最初とは違う違和感を感じましたか？あてはまるものに○をつけてください。

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| a. 最初に感じた違和感がそのまま残っている | b. 違和感が残っているが、最初よりも少なくなった |
| c. 最初に感じた違和感が講演後はなくなった | d. 最初から違和感はなかった |
| e. 最初とは異なる違和感を感じた | |

	全体	中1	高1	高3	男	女
a. 最初に感じた違和感がそのまま残っている	17.95%	17.07%	22.45%	13.04%	27.59%	7.84%
b. 違和感が残っているが、最初よりも少なくなった	15.38%	14.63%	20.41%	4.35%	10.34%	23.53%
c. 最初に感じた違和感が講演後はなくなった	11.11%	17.07%	8.16%	4.35%	8.62%	13.73%
d. 最初から違和感はなかった	42.74%	39.02%	38.78%	60.87%	41.38%	45.10%
e. 最初とは異なる違和感を感じた	5.13%	4.88%	8.16%	0.00%	5.17%	3.92%
未回答	7.69%	7.32%	2.04%	17.39%	6.90%	5.88%

※「漱石アンドロイド」の写真、及び動画の著作権は、全て学校法人二松学舎に帰属します。

漱石アンドロイドの共同研究について

大阪大学大学院基礎工学研究科

教授 石黒 浩



これまで多くのアンドロイド（人間に酷似した姿形、表情、動きを持つロボット）を開発してきたが、新たに、夏目漱石という偉人のアンドロイドを作る機会を得ることができたことは大変光栄なことである。

この新たなチャレンジは、ロボット工学における意味以上に、文学研究的、社会的意味を持つと考えている。

漱石アンドロイドに取り組む最も重要な理由は、現時点において、夏目漱石とは誰も直接話したことがないという点である。

これまでに開発したアンドロイドを振り返ってみたい。まず最初に、私自身のアンドロイドである。私のアンドロイドは、無論私自身のコピーであり、現役の研究者として活躍する私の代わりに講演を行うこともできる。現在の私の存在感を持ちながら、私の代わりに講演することで、私の活動範囲を広げ、私の社会における存在感を強めることに貢献している。そして、人々は、私とアンドロイドを直接比較することができ、その存在感が似ていることや、また逆に似ていないことを議論する。

次に思い出したいのは、落語会で2人目の人間国宝である、桂米朝師匠のアンドロイドである。米朝師匠の米寿の記念に作成させていただいたアンドロイドで、米寿の師匠の姿ではなく、師匠がテレビに頻繁に登場し、世間に最も広く認知されていたころの姿形で作らせていただいた。この米朝アンドロイドは、最盛期の師匠の存在感を再現し、後世にその名人芸を伝えることを目的にしていた。実際に米朝アンドロイドの落語の人気は非常に高く、その寄席は今でも多くの聴衆を集めている。

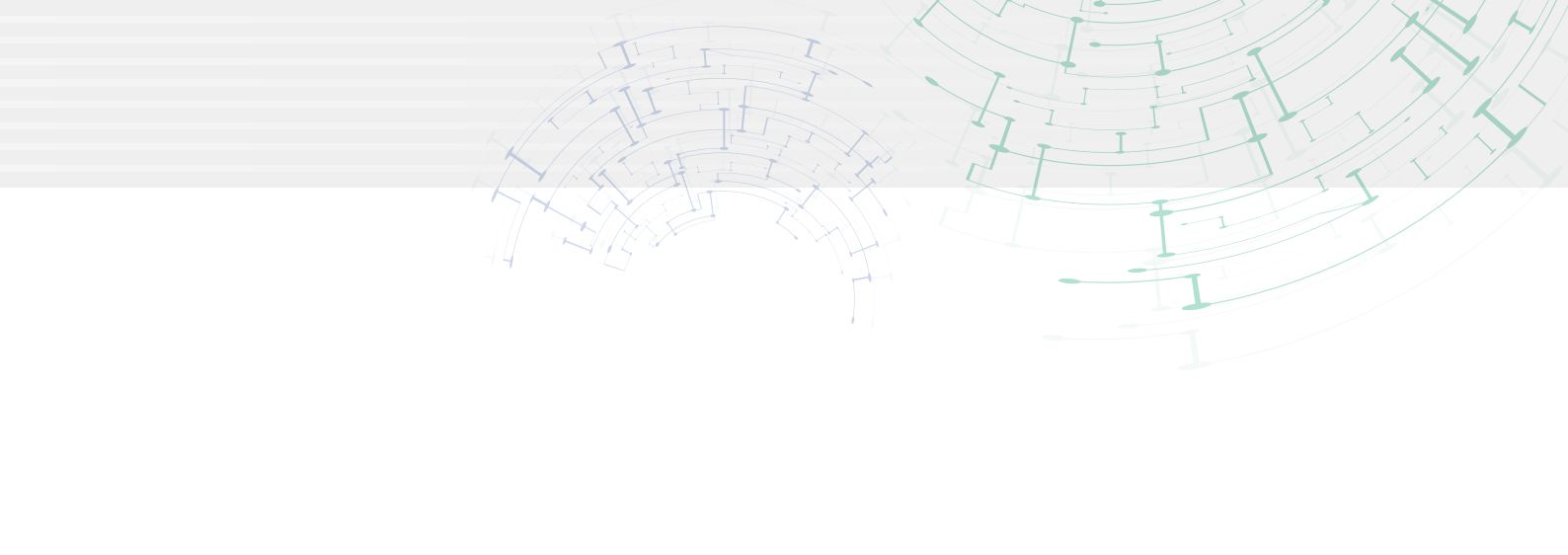
この米朝アンドロイドは、そのモデルが生存している（2015年3月に師匠は亡くなっている）のであるが、私のアンドロイドのように直接比較されることはない。むしろ、家族を始め本人と直接関わった経験を持つ多くの人々が、アンドロイドを通して師匠の若かりし頃の姿を懐かしく思うと同時に、当時のように師匠の名人芸を楽しんでいる。そうした米朝アンドロイドは、アンドロイドと認識されながらも、時に本人と同等の存在感を持つ。米朝アンドロイドの寄席に参加すると、最初は米朝アンドロイドに違和感を感じるが、落語が進むにつれて、直ぐに落語に引き込まれると同時に、米朝アンドロイドを本人らしく感じるようになる。また、米朝アンドロイドにタッチパネルを利用した対話機能を実装し、米朝アンドロイドが来客に対して人生相談するデモンストレーションを行ったこともある。来客はアンドロイドと解りつつも、その話や仕草に米朝師匠らしさを見つけながら、本人の若かりし頃を懐かしんでいた。

そして、今回の漱石アンドロイドである。そのモデルである文豪夏目漱石が存在したことは日本では誰もが知っており、その作品の一つや二つは大抵の人が読んでいるであるが、現在、夏目漱石と直接会って話したことがある人は、親族も含めて誰一人存在しない。このような過去の偉人のアンドロイドを製作することは、様々な意味を持つ。

まず、その漱石アンドロイドの制作そのものが文学研究に新たな研究方法を提供するということである。文学研究とは、その作者の作品を通じて作者像を浮き彫りにすることである。作品を通して感じられる作者本人の性格やものの考え方等に関する情報を集め、作者の人物像の再現を試みるのである。そうした文学研究に、作者のアンドロイドを用いることは、様々な研究者の意見をアンドロイドに収斂して、より精緻に作者の人物像を再現するという大きな意味を持つ。文学研究がアンドロイドを用いて新たな研究手段を持つことになるのである。

そして、そのように再現された夏目漱石の人物像を持つ漱石アンドロイドは、多くの人に影響を与え、夏目漱石の人格さえも持つようになる可能性がある。

そのための取り組みとして、日本全国の小、中、高校や公共施設において、主に子供達を対象に、夏目漱石作品の漱石アンドロイドによる読み聞かせを計画している。作者本人から直接読み聞かされれば、文学に対する興味を失いつつあ



る現代の子供も、再び文学に興味を持つのではないかという期待である。

ただ、子供達が文学に興味を持つかどうかよりも、より重要なことは、夏目漱石の人格が、人々との関わりを通して、どのように漱石アンドロイドによって再現されていくか、または、新たに作られていくかということである。

読み聞かせというのは、漱石アンドロイドが夏目漱石らしく人々と関わるための手段である。無論、読み聞かせよりも、直接対話できる方がいいのであるが、対話機能の実現は容易ではないし、不完全な対話機能は間違った夏目漱石のイメージを再現することとなる。対話内容が限られているとしても、漱石アンドロイドの対話は、文学研究者が夏目漱石らしいと評価するものになっていなければならない。それ故、対話する漱石アンドロイドの実現はしばらく時間がかかる。

漱石アンドロイドが日本の各地で人々に読み聞かせを行えば、人々は漱石アンドロイドこそが夏目漱石だという印象を持つだろう。現在多くの人は、千円札に描かれていた夏目漱石を、夏目漱石のイメージとして持っている。漱石アンドロイドは、発話、表情、動作によって、そのイメージをさらに膨らませ、夏目漱石は漱石アンドロイドによって表現されていると、人々に思わせるようになるかもしれない。そして、そうした漱石アンドロイドが夏目漱石本人に代わって、新たな影響を人々に与えるようになれば、漱石アンドロイドは夏目漱石の人格を持ち、現代の夏目漱石そのものになる。

作家研究の問い直し——アンドロイド による漱石像形成過程の検証

二松学舎大学大学院文学研究科

教授 山口 直孝



二松学舎大学の共同研究チームが最初に手がけたのは、漱石アンドロイド制作に必要な情報を収集し、提供することであった。

夏目漱石は、おそらく近代作家の中で最も研究が進んでおり、おびただしい数の関連書が刊行されている。伝記の類も多く、関係者の証言も膨大である。それらに目を通していただけても手間がかかる。しかも、今回の場合は、別の難しさもあった。

文芸を論じる立場の人間が通常重んじるのは、人物像である。独自な人柄を端的に示した挿話に注目が集まり、内面が推し量られる。しかし、漱石アンドロイドは、身体的存在としての漱石を復元する試みである。まず目指されるのは、外見がそっくりであることになる。どんなに面白い逸話でも、視覚や聴覚に関わる情報が含まれなければ、位置づけは低くなってしまふ。資料に対して、従来とは異なる意識を向けることが求められた。

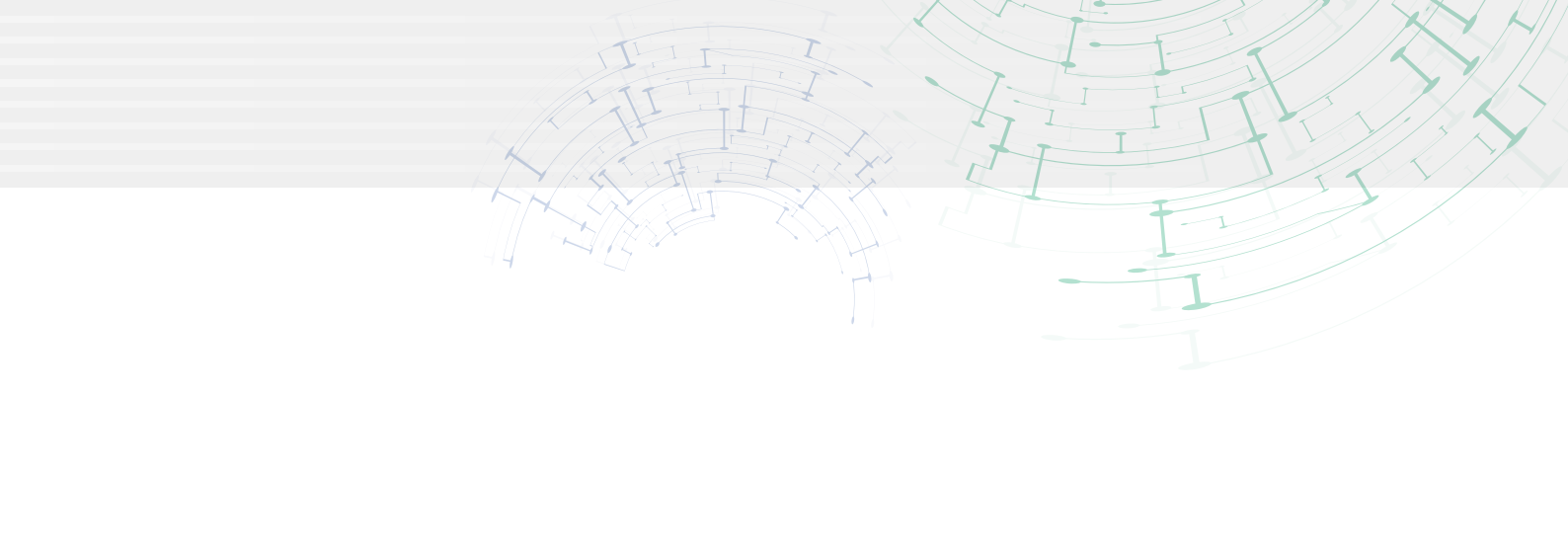
漱石は、百年前にこの世を去っている。三次元で再現するための情報が十分であるとは言えない。写真は、それなりの枚数が残っているが、改まった表情のものが多く、すべて白黒である。動画はなく、音声も確認できていない（唯一の音源と言われる、教え子の加計正文が録音した蠟管レコードは、損耗が著しく、再生に成功していない）。旧千円札の肖像に選ばれ、日本人なら誰もが知る漱石であるが、一方で、彼は誰も実際に会ったことのない、不明瞭な存在でもある。漱石アンドロイドの制作に当たっては、朝日新聞社提供のデスマスク、明治村に保存されていた漱石の実際に着ていたフロックコート、あるいは身体測定の記録などを参照することで、できるかぎり精確さを期したが、それでも不明の点は多かった。空白を埋める手がかりは、ほかには文字情報しかない。漱石と交流のあった人間の回想や印象記から見かけに関する記述を拾い出す作業を、アンドロイドの制作と並行して進めた。

最初に課題となったのは、肌の色である。幼い時に天然痘に罹り、胃の慢性疾患に悩まされていた漱石の血色がよいわけではない。けれども、漱石の肌についての記録が見つからない。少々の顔色の悪さであればあえて筆にする必要はなく、証言のないのは当然でもあるが、弱らされた。結局、「彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活発な兆候をあらわしている。」という『吾輩は猫である』の描写を参考にしたが、猫の観察が適切であるか、保証の限りではない。

次に浮上した問題は、白髪の度合いである。漱石は晩年急速に老化が進んだことが近い人の回想など知られている。白髪も相当増えたらしいが、漱石アンドロイドが基準とした1911年当時の頭髪はどのような状態であったか。いろいろと文献に当たってみたが、わからなかった。おそらく当時として目立つものではなかったのであろう。写真の印象も踏まえて、わずかに白髪を混ぜるという選択をしたが、頭部に対する意識が人物描写において予想以上に低いものであることに思い至る機会ともなった。

漱石アンドロイドの制作発表を行った際、漱石の孫で協力者の夏目房之介氏は、「ぜひ笑ってもらいたい」という希望を述べられていた。漱石には、笑顔の写真がない。唯一書斎で口元を緩めている写真は、加工だと言われている。漱石を笑わせることは、房之介氏だけでなく、関係者全員の目標であった。この点に関しては、文献資料が大いに参考になった。

講談や落語を好み、機知に富んだ俳句を詠んでいることからわかるように、漱石はユーモアを解する人である。証言からは、さまざまな笑いが浮かび上がる。「呵々として大笑された」（本多嘯月）や「にやにや苦笑」（高原操）したなど、場所や相手によって、漱石は自在な表情を見せている。多様な笑いの中から、まず漱石アンドロイドに組み込まれたのは、微笑であった。漱石が常にたたえていた、おだやかな表情は、木曜会に集まった年少の者たちを始めとする周囲の人間



を和ませるものであった。相手を包み込むような微笑は、漱石アンドロイドの象徴的な表情とするにふさわしい。実際、お披露目の記者会見や一般公開においても、微笑む漱石は好評であり、見る者との距離が一瞬で縮まっていた。

現在は、微笑に次ぐ笑いの表情を模索中である。笑い声を出すようにしたいと考えているが、実現は簡単ではない。文献では、「あははは」と笑った（松浦嘉一）などと記されているが、擬音語通り発声している人はそういないであろう。漱石自身の筆によるものも、擬音語の使用が目立つので、この点ではあまり頼れない。逆に注目されるのは、談話である。通常は他人がまとめた記事は作家自身が記した文章に比べて扱いが一段低い、話し手の言葉づかいを再現している点では大いに参考になる。記者によってまとめ方が異なるため、見極めは難しいが、漱石の笑いやしやべり方を再現していく上で談話は鍵となる資料である。精査の上、声を立てて笑う漱石を実現したい。

漱石アンドロイドの本体は完成し、試験的な運用を始めているものの、講義や講演を本格的に行うことはこれからである。長時間の活動させる上で、より細やかな動作や自然な表情を備えることは、不可欠の条件となる。伝記的な事実の洗い出しは、今後も継続していく予定である。

漱石アンドロイドと関わって漱石の資料を検証することは、作家研究のありかたを問い直すよい契機となった。それは、漱石像を形成してきた文献の記述の不完全さが見えてきたからである。写真と文字とでは伝える情報の質が異なることは当然であるが、そのことを説得的に示す事例として、漱石アンドロイドは恰好のものであったと言える。作品群の作り手として思い描かれる作者は、すぐれて人格的な存在である。輪郭がはっきりしている必要はなく、むしろ曖昧な方が自由に想像を当てはめることができる。伝記や体験談においても、漱石の即物的な描写の比重が少ないことが発見できたことは、予想外の収穫であった。

漱石アンドロイドの研究事業の大きな柱として、受容の様態を調査することがある。これは、アンドロイドという異物を、人がどのような過程を経てなじみのある存在として受け入れていくかを検証する作業である。一見作家研究とは無関係に見えるが、アンドロイドのどの部分が漱石であることを訴えるのかを考察することで、接点生まれよう。細密に造られた漱石アンドロイドであるが、接する人はすべての面に目配りするのではなく、関心のある部分に意識を集中させ、「漱石そっくりだ」、あるいは「漱石と違う印象を受ける」などの判断を行う。漱石アンドロイドへのまなざしの注がれ方を対象とした分析を行うことによって、人物像の形成の過程をたどることが可能である。

門下生の小宮豊隆によれば、漱石は左利きであつたらしい。アンドロイドの動作を洗練させていく上で、利き腕は当然考慮されなければならないが、そのことが人物の印象に大きく関わるものであるかどうかは分からない。むしろ、わずかな眼の動きの方が強い印象を残すこともあろう。信頼できる資料に基づいて漱石らしいしぐさを付加していき、また、アンドロイドから人々が受けた印象から、過去の証言をたどり直す。伝記研究と受容研究との相互作用によって、作家像の形成過程が明らかになる意義は大きい。特定の人物をめぐる主観的な表象が作られ、確立していく機序を把握することができるのは、学際研究ならではの成果と言えよう。アンドロイドから得られた知見を還流させることによって、漱石を漱石たらしめている要件が何であるかを見極めることができる。これは、新たな作家論と呼べるものであろう。

「漱石アンドロイド」研究活動報告

二松学舎大学大学院
文学研究科長 江藤 茂博



テーマ 再現性の追求とアンドロイドによる教育効果についてー漱石の漢詩文を中心に

■ 研究活動内容

「漱石アンドロイド」というかたちでの漱石像の再現集約においては、ひとつは、実証的再現の可能性の問題として考察を重ねてきた。簡単なまとめかたをするならば、直接的な再現としては、音声再現の可能性を検討している。間接的な再現としては、漱石の残した漢詩作品をひとつの到達・結果と考えて、その到達点に向けての漢詩作法の再構築を検討している。

直接的な再現の可能性については、国立科学博物館産業技術史資料情報センターからの、蠟管の再現に関する情報提供があった。蠟管に残された音声をレーザー方式での再現が一般的であるが、この漱石の音声蠟管は劣化が激しく不可能とのことは、広く知られている。しかし、スキャナー方式であるならば可能であることが判明したのだとのこと。その処理を行える企業がありその見積もりについても、おおよその金額が示されている。漱石の声の再現が可能ではないかとのことなので、今後、漱石の音声再現については、国立科学博物館産業技術史資料情報センターとの共同開発の可能性を含めて検討していきたいと思う。

間接的な再現の可能性については、①三島中洲および夏目漱石の時代の漢詩作法に関する資料の収集、②夏目漱石の漢詩の分析、③夏目漱石の文学観・教師像の構築を、研究調査の基礎としている。すでに、①に関しては、本学に所蔵する漢詩の入門書・作法書のチェック、古書店目録等での類書に関するデータの検索等を行っている。②に関しては、メンバーによる研究発表がなされているだけでなく、漢詩に関する研究者に夏目漱石の漢詩研究分析を依頼している。徐々に、漱石漢詩の特質が明らかになるであろう。③に関しては、先行する夏目漱石研究の調査を行い基礎的なデータの蓄積を進めている。

■ 今後の研究展開と目標

上記でまとめた直接的な再現と間接的な再現とを組み合わせることで、さらに私どもは「漱石アンドロイド」による漢詩作法の講義プログラムの完成を目指したいと考えている。これは、夏目漱石像の再現ではなく、「漱石アンドロイド」という結実点を活用した情報の集約作業のひとつであり、かつ疑似夏目漱石＝アンドロイドによる教育効果というものを検証する場を構築することでもある。つまり、AIを含む、今後の人工教育システムあるいは学習システムにおいて疑似人間化（疑似身体性、疑似人格制）の効果・役割を研究するうえでの基礎作業となるだろう。こうした組み合わせに向けて、ひとつひとつ克服しなければならない問題を、本研究メンバーでは今後の共同研究活動としてすでに準備の段階に入っている。

展開として考えられるのは、漱石の漢詩についてのデータを基とした漢詩作成プログラム（AI）である。このプログラムによって、漱石の文章表現を分析すると、逆に漱石のどのような漢詩的世界が文章に組み込まれていたのかを抽出していくことができるからだ。それを遠い目標に置きながら具体的な次年度の目標としては、直接的な再現としての蠟管による音声再生、間接的な再現としては「漱石的講義 漢詩作法」という小冊子の刊行を目指したい。

漱石アンドロイド研究：今後の展望

二松学舎大学文学部
教授 改田 明子



漱石アンドロイドが完成し、さまざまな場面での運用が開始された。本稿では、漱石アンドロイドについて、今後期待される研究の展開について私見を述べたい。

漱石アンドロイドは、これまで人々が分散的に所有していた漱石のイメージを単一の実体に具現化し、実際に社会的な場面の中で人とかわりながら人に影響を与えることができる存在である。漱石アンドロイドの新しい特徴は、現存しないがある程度人々に知られている人物をモデルとしてアンドロイドに具現化するという点である。この新しい試みによって、アンドロイドに人格を実現することにかかわる諸問題への認識が深まり、さらなる運用への示唆を得ることが期待できる。また、漱石アンドロイドの運用とその実態調査を通じて、アンドロイドの社会的受容に関する知見を得ることが期待できる。今後アンドロイドは、介護、教育などの人とかわる社会的な場面に導入される可能性がある。適切で効果的なアンドロイド導入を実現するためにも、アンドロイドが人間の心理過程に及ぼす影響の研究は重要である。それと同時に、アンドロイドの社会的受容の研究は、「人間のようなものを受容する人間のしくみ」に関する研究として、人間の社会性が成立する基盤の解明にむけた、新しい視点からのアプローチとなるという意味でも興味深い。以下に、具体的な展開の可能性を列挙する。

1. 漱石アンドロイドの人物像構築

漱石アンドロイドは人工物であり、その具体化においては製作者の意図が不可欠である。漱石アンドロイドが、どのような社会的存在となることを目指して構築されるのか、その指針を確定する。それと同時に、漱石に関する客観的資料にもとづいて、漱石アンドロイドの人物像にふさわしい属性を選択して、漱石アンドロイドに具体化される人物像を構築する。

2. 漱石アンドロイドの人間としての存在感と漱石らしさの認識

漱石アンドロイドの構築過程において、身体部位の運動から表情、音声、表出された内容、対人的な反応性など、人間的要素の多様な側面を組み込むことができる。実際に人が漱石アンドロイドと出会って交流したときに、漱石アンドロイドに人間的存在感を感じるために重要な人間的要素はどのようなものなのか、実験的に検証する。また、そのような人間的存在感の成立と漱石イメージの構築・受容がどのように関係するのかという問題も興味深い。すなわち、人間らしいという「人間的存在感」に加えて、どのような人物像を提示したときに、人が「漱石らしい」と感じるかという問題である。この問題は、人が漱石についてどのような先行イメージを持っていたかということと関係するものと考えられる。漱石アンドロイドに「漱石らしさ」を実現するために重要な役割を果たしている要因を実験・調査によって検証したい。漱石らしさの受容の問題は、人がどのような情報をもとに実在する人の人物像を構築してゆくのかという問題としても興味深い。

3. 文学教材の学習における漱石アンドロイドの利用可能性

教育場面において、人間的存在感を有する漱石アンドロイドが、漱石作品やその解説などを伝えた場合、その聴き手である学習者はどのようにその内容を理解するのかという問題について検討する。漱石アンドロイドの有する人間的存在感と漱石らしさが、文学作品を伝える上で学習者にどのような影響を与えるのだろうか。実際に、学習者に漱石アンドロイドによって学習素材を提示する場面を設定し、その効果と受容過程の特徴を検証してゆく。このような研究の知見から、教育場面でのアンドロイド利用の可能性について示唆を得ることが期待できる。

大学マーケティング戦略としての 「漱石アンドロイド」の実践的研究

二松学舎大学大学院文学研究科

教授 塩沢 一平



1 はじめに

私は、上代文学をメジャーとしているが、ダブルメジャーとしての大学マーケティング戦略の面から「漱石アンドロイド」を研究する。その展望について述べることにする。

18歳人口減少は、良質な学生の確保と運営資金の確保という意味で、大学にとって非常に厳しい問題である。この問題を解決し、大学が生き残り発展するには、戦略的なマーケティングが必要になる。この大学マーケティング戦略に、「漱石アンドロイド」がいかなるコミットができるかについて、

①ブランドイメージ戦略としての「漱石アンドロイド」

②エンrollmentマネジメントとしての「漱石アンドロイド」

という2点について実践的に研究していくつもりである。以下詳しく述べていきたい。

2 ブランドイメージ戦略としての「漱石アンドロイド」

まず、①「ブランドイメージ戦略としての『漱石アンドロイド』」について、二松学舎大学との関係から述べることにする。

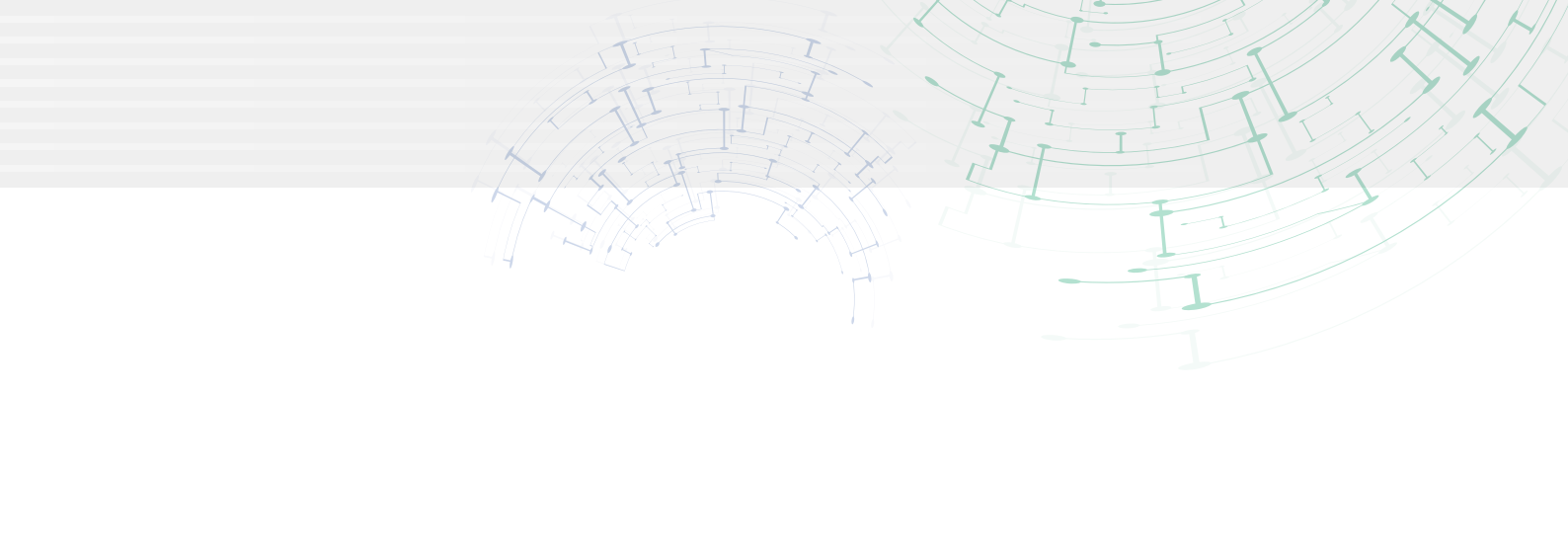
ブランドとは、a 誰もが、b どんな特徴がある機関であるか、c それを象徴するものは何か、を理解していることが大切である。二松学舎大学は、ブランドのbイメージをもってもらう以前にaのブランドそのものの認知度が低い。「リクルート進学ブランド調査」によると、ここ5年ほどの本学のブランド力は、120位ほどである。学科内容や受験生が重なる競合大学の東洋大学（10位ほど）・大東文化大学（80位ほど）と比べても、非常に低い（中央学院大学・聖心女子大と同じくらい）。また、志願度は、男子88位→106位、女子106位→138位と低下。イメージも低下している。

従来二松学舎大学は、21世紀CEOプログラム「日本漢学研究の世界的拠点の構築」に見られるように、そのルーツである漢学などの研究を発信することによって、堅実にブランドをアピールしようとしてきた。二松学舎で漱石が学んだという点では、漢学との重なりはあるもの、今回は「漱石アンドロイド」というある種のキャラクターによって認知度を高めようという全く別の戦略である。

大学キャラクターといえば、早く東洋大学がムーミンを（1997）、東京電機大学でも鉄腕アトムをキャラクターとして採用し（2007）、認知度をアップさせようとしていた。これらのキャラクターと「漱石アンドロイド」とは、誰でも知っているという点では共通点があるものの、いくつか異なる点がある。まず、もともと他のキャラクターのように大学と関係がなかったものを結びつけたものではなく、実際に学んだ漱石をキャラクターとしている点である。ムーミンや鉄腕アトムは、元々キャラクターとしてさまざま使用されてきたものであるが、「漱石アンドロイド」は、アンドロイドをキャラクター化して使用するという、全く新しい試みである。

さらに、「漱石アンドロイド」は、三次元のものとして目の前に登場し語りかけるキャラクターである。この点に関しては、2017年3月のオープンキャンパスでアンドロイドが講演を行うことになっており、ツイッターでも「二松学舎大学の、夏目漱石（漱石アンドロイド）が講演を行います、って広告、パンチ力ありすぎるなあ。漱石ロボ？もしくはメカ漱石？とかいうと偽者っぽくなるのに、アンドロイドだとそうも思わないのはなぜだろう」（3月11日）「漱石アンドロイドの講演でなんかちょっと興味ひくー。二松学舎大学の広告」（3月13日）などという反響もみられる。

この「漱石アンドロイド」が、二松学舎大学の認知度アップにどれほどの影響をあたえているかを、オープンキャンパ



スアンケート・新入生生活アンケートから分析する。また、大作大学とのコラボレーションにより、イベントやメディア露出におけるツイッターのアクセス分析やアンドロイドをニコニコ動画などに登場させ、アクセス分析を行うこととする。

3 エンロールメントマネジメントとしての「漱石アンドロイド」

次に、②「エンロールメントマネジメントとしての『漱石アンドロイド』」について述べることにしよう。

エンロールメントマネジメントとは、入学前から在学中、そして卒業後まで学生をサポートする総合的な学生支援をいう。18歳人口が減少している中、早くから大学と関わりをもってもらい入学してもらうことは重要である。また在学中の支援により退学者を減らすことも、校納金を維持していく上で非常に重要である。また、卒業後も大学と関係性を持つことによって大学の支持者になってもらい、寄付金や子弟の入学など様々な大学のサポーターとなってもらうことが重要である。

「2」で述べたように、「漱石アンドロイド」は、キャラクターでありながら、三次元に存在し、語りかけるキャラクターである。入学前のオープンキャンパスへの興味をかき立てる存在であり、自校出身の著名人（のアンドロイド）として、二松学舎大学への関心を高める役割も果たすと考えられる。また「漱石アンドロイド」は、入学式でも登場する予定となっている。その入学式後の一週間は、「黄金の七日間」とも呼ばれ、この期間にどれだけ大学への帰属意識を持てるかによって、あとの大学生活が大きく変わってしまう時期である。第一志望でない不本意入学の学生に対しては、この時期にしっかりと帰属意識が持てないと、不登校や退学につながる可能性がある。帰属意識を持つための手段として、自校教育が有効であることは、早く2007年からこれを取り入れている立教大学の調査によって明らかになっている。二松学舎大学と関わりが深い漱石（アンドロイド）が入学式で語ることは、自校教育の一つとして有効である可能性がある。二松学舎大学への入学者も多い附属高等学校では、既に昨年11月に「漱石アンドロイド」による講義が行われている。大学の卒業式でも特別教授として祝辞を述べている。様々な場面で、大学への帰属意識を高める働きを果たすことが可能と考えられる。

また、全国の機関へ出張（貸し出し）も行われる予定であり、出張地の卒業生に大学への関心をもってもらえる可能性がある。卒業生も受講している公開講座への登場でも同様な効果が期待される。

これらの各場面において、アンケートを実施することによって、エンロールメントマネジメントとしての「漱石アンドロイド」が有効であるかの検証を行いたいと考える。

4 むすび

以上のように、ブランドイメージ戦略としての「漱石アンドロイド」、エンロールメントマネジメントとしての「漱石アンドロイド」という実践のなかから、その有効性を検証することによって、大学マーケティング戦略としての「漱石アンドロイド」の実践的研究を行っていく予定である。

日本語学的観点から見た 今後の課題と展望

二松学舎大学大学院文学研究科

教授 島田 泰子



1. 前置き・漱石アンドロイドにおける「リアル」の追究について

本稿の筆者は、本プロジェクトの本学側構成員として末端に名を連ねているものの、実質的具体的な参画はいまだしておらず、完成後の活用に関する助言や発案が主な役割であると理解している。プロジェクト関連の打ち合わせなど会場への出席はこれまでに2回のみ、制作中のアンドロイドについては、基本的な情報を間接的に得ただけで、完成時の記者会見に同席して初めて実物を目にするまでは、その具体的な詳細についてほとんど知るところのない状態であった。こういった事情と経緯から、本稿の内容は、プロジェクトに具体的に関わった立場からの「報告」ではなく、いささか傍観者の立場からの提言に近いものであることを、最初にお断りしておきたい。

完成した漱石アンドロイドは、2016年12月8日に行われたマスコミ向けの完成発表記者会見当日から巷間の話題となり、夜のニュースを初めとして各局が取り上げたことから、大きな注目を集めた。報道を通じて得られた感想の多くは、アンドロイドの「人間らしさ」への驚きに関するものであり、まばたきをしたり記者会見の会場を見回したりといった所作に見られる「芸の細かさ」を面白がる声も聞かれた。その中でも筆者が注目したのは、素材に対する2つの対立的な意見についてである。一般に知られるヒューマノイド（ヒト型ロボット）の身体に対する定着的なイメージとの差異からか、「皮膚がすべすべで、本物の人間のようだ」という声が複数聞かれた一方で、「幼少期に天然痘に罹患し、後に顔面に多数のあばたが残ったことを、漱石本人も気にしていた」という史実を持ち出して、真に「本物そっくり」なアンドロイドを目指すのであれば、そういった部分に至るまで細部にこだわるべきだ、すべすべしたキレイな肌では、ありし日の夏目漱石をありのままに再現したとはとうてい言えない……といった趣旨の批判が一部にあった（YouTube「Abema Newsチャンネル」で記者会見当日の21時に公開された「Abema TV」における小森陽一氏のコメントほか）のは、興味深いことであった。

同じアンドロイドでも、ERICA（エリカ）のように「23歳の若い女性」という設定で作製された事例では、「アンドロイドが（知能のみならず、本体の素材やインターフェイスについても）ここまで人間に近い」ことをアピールするのに、「肌がキレイで、まるで皮膚の下に血が通っているかのようだ」という要素は重要であろう。しかし、漱石のように、病歴などといった個別の事情を持つ人物のアンドロイドでは、その「肌の美しさ」は、むしろ裏目に出てしまい、アンドロイドにおける「リアル」さを損ねる要素として、批判の対象にもなるのである。そういった「個別の事情」を特に持たない、あくまで標準的な（またはそれ以上の美貌を持つ）「若い女性」というモデルに基づき、架空の人格をゼロから創出するERICA（エリカ）の場合とは異なり、歴史上実在した人物をモデルとしそれを再現したという点で、漱石アンドロイドは特異な試みである。石黒教授自身を再現した分身アンドロイド（イシグロイド）やマツコロイドのように、リアルタイムで生存するモデルとも異なり、没後100年を迎える歴史上の人物をアンドロイドにすることの困難さや課題については、すでに石黒教授自らが明言しているところである。その一つが、この「お肌すべすべ」問題であり、以下に述べる言語面の課題もまた、同様の本質的な要因に由来することであろう。

2. 本題・漱石アンドロイドの発話に関する日本語学的観察（報告）

昨年12月の完成記者会見の場で漱石アンドロイドの発話として用いられたのは、漱石の孫に当たる夏目房之介氏による事前録音の音声であったため、発話や調音のなめらかさについては自然言語そのものの「リアル」さを持っていた。しかし、それはあくまで今日的な日本語のありように照らした場合の「リアル」であって、明治期の東京で言語形成期を

過ぎた夏目漱石が話す日本語の「リアル」ではない。仮に100年の間生き続けた長寿の古老であれば、この間の言語変化を反映してその日本語はアップデートされているかも知れない。しかし、100年の時を経て長い眠りから覚め(?)現代によみがえった夏目漱石が話すことばは、この100年間に起こった日本語における変化を反映する「今日的な日本語」ではあり得ない(この間の事情は、例えば、若くして日本を離れ海外での暮らしが長い在外邦人が、ひと時代前の「古めかしい」日本語を使う事例などに照らして理解されよう: ヨーコ・オノなどはその一例)。漱石アンドロイドに、現実の夏目漱石その人のことばを語らせようとするならば、それは、100年前の日本語でなければ真に「リアル」とは言えない、ということである。

実際、明治期の東京語も含めた「近代語」の研究を含め「日本語の歴史的変遷」全般を扱うことを専門とする本稿の筆者には、記者会見の日の漱石アンドロイドの日本語には、奇異に感じられる点・疑問を抱く点がいくつかあった。例えば、「エイコク(英国)」という固有名詞のアクセントパターンが頭高型ではなく、平板化を起こして、アクセント核を持たない平板型のLHHHに発話されていた、漢数字の読み方が近年の流儀にのっとったものになっていて、「十九年」が「ジュークネン」ではなく「ジューキューネン」と発話された、など(これらはいずれも、今日的な動向に即した「平成の日本語」である)。

3. 漱石アンドロイドの日本語に、どの「リアル」を求めるか(課題)

漱石アンドロイドの話す日本語に関する「リアル」にまつわる問題点のうち、いま述べた時代差の反映に関わるものとまた異なる視点から、「リアル」の定義をめぐる今後の課題について最後にもうひとつ触れておきたい。

日本語学分野で重要となる概念に、「位相(性)」というものがある。数学用語とは異なり、日本語研究における定義は、「話し手の属性」や「場面性・文脈性」に即して変容する、日本語表現のバリエーション、ということである。「話し手の属性」には、性別や年齢、出身地のほか、所属する集団の違い、かつての身分社会においては身分階層などが含まれた。場面や文脈に即した物言いの違いは、かきこまった公的な場面とうちつけた私的な場面とでの異なりや、忌み言葉などと言われる独自の言葉づかいなどが含まれる。

文豪・漱石の話す日本語として一般に想起されるのは、そういった位相性を一切排除するところに成立する「標準的な日本語」であり、それは文章語と連続した語彙と文体を持つものであり、つまりきわめて公的な場面で発せられるパブリック・スピーキングのスタイルである。

一方で、一個人・漱石の語り口は、江戸っ子らしい口ぶりの混じるものであったことが、限られた資料から断片的に知られている。例えば、漱石が明治41年(1908年)に神田で行った講演の速記録には、部分的に江戸っ子らしい口調で語られた内容が生き生きと描かれており、「(朝日新聞社主催の講演会で演説をやれという命令に対し)やりたくないけれども、社員であって、社から月給をもらっている以上はイヤだと云う訳には……」と弁明しつつ、照れ隠しのようにカジュアルな表現を交えて「題は、何でもようがすけどもネ、……」などと前置きして『作家の態度』と題して自らの文学観を語ったという(文藝春秋2007年5月号)。

含羞の感じられるこういった生々しい語り口を、どこまで再現させ得るか。公的な・よそ行きの物言いだけではなく、この手のプライベートな漱石の物言いを、アンドロイドにどこまで求めるかは、本プロジェクトにおける今後の課題であろう。

実在した歴史上の人物である夏目漱石の姿は、「現実」的にどうであったのか。本稿の冒頭に触れたあばたの再現と並ぶ、言語の位相性という「個別の事情」を反映した「リアル」の定義と追究にまつわる問題として、以上の課題を日本語学の観点から述べた。

「漱石アンドロイド」プロジェクトの 今後の研究活動見込・展望について

二松学舎大学大学院文学研究科

教授 瀧田 浩



これから付け加えられるプログラムがあるにしても、夏目漱石のアンドロイドはとりあえず完成したと言ってよいであろう。私たちは、デスマスク・写真などの資料にもとづいた夏目漱石に似せられた顔・身体、手・腕の動きを目にすることができ、漱石の孫にあたる夏目房之介氏が録音した音声がそこから発せられるのを聞くこともできた。

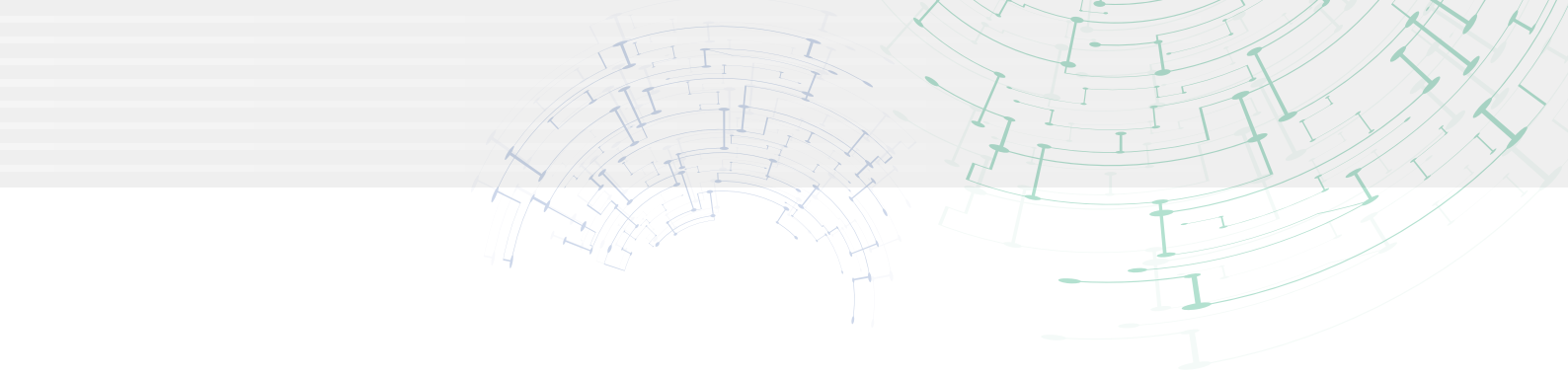
しかし、漱石を模したロボットが完成したといっても、ここから学術的に有効な研究を形成してゆくことはたやすいことではない。本プロジェクトの中心人物である石黒浩氏と組んでアンドロイド演劇をみごとに成功させた平田オリザ氏の文章をふたつ引用しよう。

さて、実は、石黒浩先生もまた、ロボットを人間らしく見せるには、このノイズ、マイクロスリップが重要な要素になることには気がついてた。ただ、それを人間工学や認知心理学の研究から応用しても、なかなか思うようにはいかなかった。〔略〕その点に関しては、私たち演出家の方が、一日の長があった。いや、演劇二五〇〇年の蓄積があった。／さらに私は、認知心理学の研究者との交流があったために、いきなりロボット研究の領域に入っても語彙を共有できるという利点もあった。／人間のリアルな動作とは何かという問いかけの同じ大きな山を、まったく別々の方向から登っていた二人が、大阪大学のキャンパスで出会ったということだ（平田オリザ『わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か』2012年10月、講談社現代新書）。

「最後のシーンはロボットですけど、観客が泣きましたからね。（中略）ああもう勝ったな、っていう感覚があった。そんな瞬間は人生でそうはない。近代劇の歴史っていうのはいろんな転機があります。ひとつはスタニスラフスキーが人間の内面というものをきちんと再構築して、そこから発話するとリアリティーが出る、っていうことで、それが百年続いてきたわけですけど、ロボットは絶対に内面がないんで、そのスタニスラフスキーの理論が間違ってたというのが物理的に証明できた。現代口語演劇が誕生して二十年なんですけど、その理論としては「外的な要因だけでリアルは絶対構築できるし、内面は関係ない」っていうことを理屈でずっと言ってきたわけです。二十年かけて。だから言うなれば相対性理論が実験で証明されたようなものですね」（佐々木敦によるインタビュー。初出は『エクス・ポ』第2期第0号、2010年1月。引用は佐々木敦「アンドロイドはロボット演劇の夢を見るか?」『KAWADE夢ムック 文藝別冊 平田オリザ』2015年5月）

前者の引用からは、アンドロイド演劇プロジェクトの演劇側の中心人物に認知心理学の知識・関心・理解がすでに存在していたこと、そして演劇そのものとアンドロイド研究には「人間のリアルな動作とは何かという問いかけ」が同じ目的として共有されていたことがわかる。後者の引用からは、アンドロイド演劇が平田オリザの演劇に対する持論を証明するための方法となっていたことがわかる。演技の前提として内面を重視するスタニスラフスキー理論に対して人間の身体に特化した演技観の優位を説くにあたり、アンドロイドが人間の身体と対峙して舞台上にあることは重要である。役者の身体を内面から切り離して前景化するためには、人間の横にアンドロイドを配置することが最も効果的なのである。内面のないアンドロイドが演技者として機能するとき、役者の内面の権能は無化されてしまうことになる。

さて、アンドロイド演劇のみならず、落語家である桂米朝の米朝アンドロイド、テレビタレントであるマツコ・デラックスのマツコアンドロイドなどと比較してみれば、漱石アンドロイドを研究する特性と問題点がこの点をめぐって存在するこ



とが理解できるだろう。舞台上のアンドロイド、落語家、テレビタレントの場合、発声をふくめた身体性に芸術的・職業的な特性があるため、人間の身体に似せられたオールタナティブな身体であるアンドロイドが配置された時、それを見る者は人間の身体・声と相対化する思考が促されることによって印象や効果が生まれる。その印象や効果はおのずとそこに社会的な意義を含んでもいるのである。

それに対して、夏目漱石の身体・声自体は芸術的・職業的特性と深く結びついていない。漱石の肖像写真は反復して流通し、図像は紙幣にまでなったが、これまでの漱石をめぐる研究の中心は、漱石が原稿を書き、印刷・出版された本文によって研究・評価され、本文こそが研究の焦点であったことは言うまでもない。したがって、石黒浩氏がこれまでに関わったアンドロイドのプロジェクトとは異なる角度からの研究が求められていることに、私たちは十分自覚的にならなければならないのだ。

そうした中で、私が可能性を感じるのは、漱石が執筆した小説や随筆等ではなく、漱石が口頭で発した講演録や口述筆記の文章をアンドロイドの動きとともに発声させるという企画である。漱石の講演集としては存命中に出版された『朝日講演集』もあり、漱石の講演に対する関心は漱石が活躍した同時代にすでに存在していたことがわかる。『朝日講演集』には現在国語教科書に収録されることもある「現代日本の開化」等が含まれているし、『朝日講演集』には収録されていないが、学習院における講演「私の個人主義」は漱石の人生観を垣間見ることができる重要なものである。二松学舎の思い出を語った「落第」もまた記者が漱石の談話を書き取ったものである。

漱石の講演や口述筆記は小説ほどに研究がなされていないが、漱石の身体的なふるまいとともに声としてこれらが再生された時、聴衆は貴重な経験を得ることになるだろう。それが反復されて共有されることになれば、それは研究する価値を持つ文化経験となってくるはずである。

「漱石アンドロイド」 プロジェクト研究報告

二松学舎大学大学院文学研究科

教授 増田 裕美子



生存していない作家・夏目漱石の身体をアンドロイドとしてよみがえらせ、漱石の作品に新たな光が当てられることになる今回のプロジェクトは、文学というものの見直し、再検討を必然的に迫るものとなる。すなわち文学作品は単なる文字の羅列ではなく、人間の身体から発せられる音声によって形作られるという事実を再確認することである。従来、文学研究は文字テキストに基づいてなされており、そのことに対して疑問が提起されることはなかったが、文学の発生を考えると、文字の誕生以前から人間は音声によって文学的なものを生み出していた。いわゆる口承文学、口承文芸というものである。そもそも「文学」という言葉自体が19世紀に生み出された言葉である。そこで、今一度、「文学」概念をあらたに構築する必要がある。すなわち「文学」の身体性を回復させることが必要であり、そのために漱石アンドロイドという目に見える形で作家の口から作品を語らせることが求められるのである。

漱石の作品は小説ばかりでなく、評論、俳句、漢詩、英詩など多岐にわたるが、それらをいったん文字テキストから解放する必要がある。文字テキストを見ないで、音声だけを聞く、あるいは文字テキストを見ながら音声を聞く、そして文字テキストだけを読むというような、さまざまな受容の仕方を試みて、聞く人、読む人の理解にどのような違いがあるのかも知る必要がある。

目から入る情報は耳からの情報に較べて格段に情報量が多いが、果たしてそのことは作品の真の理解に結び付くのか、ということも重要なポイントである。たとえば洒落や言葉遊びは耳から聞いてわかることの方が多いかもしれない。とすれば、作品の理解とは何を指すのかという議論にもなるであろう。

また作品の内容によっても違いがあろう。「私の個人主義」というのは講演なので、聴衆にわかりやすい言葉で語られている。漢詩や英詩、俳句は公に発表されないものもあるため、読者や聴衆を意識して作られているとは言えない。ただし基本的に漱石は音や声というものを意識して創作をしている。このことは彼の生きた時代を考えるとわかりやすい。いまだテレビもラジオもない時代、人々は集まっては互いに話を交わし、また寄席や劇場に行き、落語、音曲、芝居の類を楽しんでいた。漱石の作品もまずは耳から受容されたことも忘れてはならない。処女作『吾輩は猫である』は高浜虚子主宰の『ホトギス』に掲載するにあたって、虚子の朗読会で朗読された経緯がある。考えてみれば、当時はコピー機もない時代で、原稿を朗読するのは理にかなっていたとも言えよう。また新聞に掲載された漱石の作品は誰もが目で読んでいたわけではない。教育は平等に行われていたわけではなく、とくに女子教育は遅れており、識字率は今とは異なり相当に低かった。漱石の知人が漱石の新聞小説を家族の前で読み聞かせたという漱石宛ての書簡も残っていることからわかるように、教育程度の高い一部の人間が新聞掲載の小説を読めたのであり、読み聞かせは当たり前のこととして行なわれていたのである。

以上のことからアンドロイドによる作品朗読は新たな漱石研究を開いていくという意味でも重要な意味を持つであろう。

その場合重視したいのが謡曲との関連である。漱石は謡曲をことのほか好み、自分でも謡を謡って楽しんでいた。そのことは漱石の創作にも関わってくるのだが、従来この点についてはほとんど研究がなされていない。漱石が声に出して謡を謡っていたことは、漱石作品が声に出して読まれることと密接に結びついている。漱石作品の多くにルビが振られているのも、漱石作品が声に出して読まれることを前提にしているからこそである。このルビの振り方は漱石独特のものであり、現在のように漢字の読み方が一律に決まっている時代では考えられないようなルビの振り方である。

そうしたことを考えるためにも謡曲をアンドロイドに謡わせるというのは必須のことと思われる。

漱石はワキ方下掛宝生流の宝生新について謡を習っているが、その下掛宝生流の謡い方で、いくつかの謡曲を謡わせ

たい。候補はたくさんあるので、絞る必要があるが、「葵上」「船弁慶」「羽衣」「高砂」「景清」は是非謡わせたい。

漱石は熊本時代に謡曲を習っていて、ロンドン留学を経て、東京に戻り朝日新聞社に入社するころ、謡を再興したいとして、謡を再度習い始めている。そうしたこともあって、朝日新聞社入社後のプロの作家としてのデビュー作である『虞美人草』には謡曲の色濃い影響が見られる。この作品には、「船弁慶」「二人静」「鉢の木」といった謡曲への言及があり、謡を謡う人物が登場する。またヒロインである藤尾には謡曲「葵上」のシテ、六条御息所の人物像が投影されている。また『虞美人草』以前の作品においても謡曲への言及、謡を謡う人物の登場は見られる。とくに『草枕』は作品のなかで語り手の画工が、これから出会う人間を能舞台の上に見るような気持ちで見ようと宣言している。それでまずは茶店の婆さんが「高砂」の婆さんに見立てられるのであり、「墨田川」「七騎落」「羽衣」といった謡曲への言及もある。

後期の作品では『行人』のなかに「景清」を登場人物が謡う場面がある。そのほか謡曲名はあからさまに出ていなくても、謡曲の影響はいたるところに見られるので、まずは明確に言及されている謡曲をアンドロイドに謡わせたいと考える。

その上であらためて個々の作品の理解を構築し直すという作業に移りたい。

さて、漱石アンドロイドは漱石作品を理解し直すという意味だけではなく、冒頭に述べたとおり、文学全体の、あるいは文学概念の見直しを迫るものである。文字テキストに限定せず、音声テキストとしての文学的なものを探っていくことは非常に重要なことである。そうした意味において漱石の作品を音声テキストとして理解し直すことは文学全体を見直すことに繋がっていく。そこでこれからアンドロイド研究に欠かせないのは、演劇や芸能といったライブパフォーマンスへのアンドロイドの活用である。漱石が演劇・芸能の類いに強い関心を抱いていたことを念頭に置くならば、たとえばシェイクスピア劇のような演劇にアンドロイドを活用することが考えられる。シェイクスピアは現在でも世界中で人気があり、どこかで上演されない日はないであろうというほどである。漱石も英文学者であり、ロンドン留学時にはシェイクスピア研究者のクレイグ先生のもとで個人教授を受けていた。また東京帝国大学でもシェイクスピア講義をおこなっており、シェイクスピアについては造詣が深い。そのようなことからシェイクスピア劇に漱石アンドロイドを出演させるというのは興味深いのではないだろうか。

すでにこれまでもアンドロイドを活用した演劇上演が実施されており、好評を博していることは石黒先生が御報告済みのことでもある。是非漱石アンドロイドにも舞台に立ってもらいたいと思う。シェイクスピア劇は私のゼミナールが毎年学園祭で上演しており、上演実績として積み上げている関係上、そこにアンドロイドを参加させることはそれほどむずかしいことではない。アンドロイドの役どころも現在構想中である。一つ考えられるのは劇中劇スタイルを取ることである。ちなみに昨年上演したのはこのスタイルで、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の上演のため、オーディションを行なうという場面から劇が始まる。ついで配役が決まり『ロミオとジュリエット』劇が劇中劇として上演され、最後にこの上演は明日の本番のためのリハーサルであることがわかり、最後にもう一つオチがつくという展開であった。この昨年の台本テキストに沿うならば、オーディション場面で、オーディションを行なう監督としてアンドロイドに登場してもらうことが考えられる。もちろん劇中劇の中でロミオは難しいかもしれないが、その他の男性の役でアンドロイドを登場させるという方法もある。その場合は衣装を変えてその役にふさわしい格好をする必要がある。また基本的にアンドロイドは立ち上がれないので、座ったままの姿勢で演じられる役にする必要はあろう。

漱石の謡曲好きという面から、能の舞台にアンドロイドを立たせるというのも考えられなくはない。ただし、アンドロイドが座ったままであるということから考えるとやはり難しい点が多い。かなりの工夫がいるので、これは今すぐにはというのではなく、検討課題ということになろう。

謡はもちろん、その他、義太夫節、落語、講談、掛け合い漫才（この場合は相方が必要となる）など、あまり動きを伴わないライブパフォーマンスであれば、アンドロイドを活用して面白い舞台が出来上がるのではないだろうか。

以上のような展望、計画のもとに今後活動していきたいと考えている。

今後の研究活動見込・展望について

二松学舎大学大学院文学研究科

准教授 中川 桂



プロジェクト全体についての展望や計画を記す力もなく、一研究協力者としてはそこまでの任もないと思われるので、自身の分野にかかわるところについて記す。

身体表現を活動の中心とする人物については、アンドロイドを制作してその行動・表現などを再現することには大いに意味があると思われる。ただ、夏目漱石の場合は作家であり、主たる表現方法は文筆活動なので、アンドロイドの活用となると率直なところ難しい面があるのではないかと考える。つまり自作の朗読をしたとしても、生前に平生からそのような活動を行っていたというのであれば、今日においてはパフォーマンス（デモンストレーション）としての意味はあるが、それ以上の、研究に直結した表現活動としてとらえるのは難しい面があるのではないかと考える。

そのような中で身体表現について思案するに、漱石は講演活動もよく行っていたので、講演の再現をアンドロイドで行うのが、最良の活動ではないかと筆者は考えている。この点については改めて最後に触れる。

さて、筆者の専門とするところは落語を中心とした近世の芸能史であるが、その専門分野と漱石との接点となると、やはり落語になろう。漱石は謡を嗜んでいたので、宝生流の謡をアンドロイドによって再現するのも活用として適していると思うが、これについてはさらに適任の方もおられることであり、本稿では割愛する。

漱石が落語好きであることは比較的知られている事実かと思う。小説の中では『三四郎』（1908〔明治41〕年）の「三の四」において、佐々木与次郎が三四郎を連れて「木原店」（モデルは日本橋区にあった「木原亭」か）という寄席へ赴き、そこで聴いた三代目柳家小さんと、当時の大物であった（俗に初代）三遊亭円遊の芸風比較を語る、という場面は、少なくとも落語史研究の分野ではよく知られたものである。与次郎が三四郎に話をする形で、

小さんは天才である。あんな芸術家は滅多に出るものぢやない。何時でも聞けると思ふから安っぽい感じがして、甚だ気の毒だ。実は彼と時を同じうして生きてゐる我々は大変な仕合せである。今から少し前に生れても小さんは聞けない。少し後れても同様だ。

（岩波書店『漱石全集』第五巻による。ルビは省略した）

と小さんを激賞した上で、続けて円遊との芸風を比較している。

円遊も旨い。然し小さんとは趣が違つてゐる。円遊の扮した太鼓持は、太鼓持になつた円遊だから面白いので、小さんの遣る太鼓持は、小さんを離れた太鼓持だから面白い。円遊の演ずる人物から円遊を隠せば、人物が丸で消滅して仕舞ふ。小さんの演ずる人物から、いくら小さんを隠したつて、人物は活潑々地に躍動する計りだ。そこがえらい。

（同前）

当時、少なくとも都市部では、落語はかなりの人気を集めた、まさに「大衆芸能」であつたが、『三四郎』の読者が必ずしも落語に明るいとは限らない。そんな読者にもさりげなく、いま評価の高い落語家を知らしめ、また落語家によって芸風も大きく違うのだということを分かりやすく説明した、これはなかなか優れた落語批評である。小説の登場人物に語らせる形で、このように同時代の落語家評を書いた漱石の、落語への造詣の深さがうかがえるところである。

この『三四郎』の一節は小説中の場面であるため広く知られたが、幼少期から青年期に寄席へよく通ったことは随筆などに種々記されている。水川隆夫『〔増補〕漱石と落語』は、両者の関係を知るのに適した書なので、以下、同書を参照して記す。

『硝子戸の中』（1915〔大正4〕年）「二十」では、かつて講釈の寄席にたびたび行き、南鱗（岩波書店『漱石全集』第十二巻の注解によれば田辺南鱗）を聴いた記憶がある、と記している。また同書「三十五」では「私は小供の時分能

く日本橋の瀬戸物町にある伊勢本といふ寄席へ講釈を聴きに行つた」と記し、この寄席が回数でいえば最も多く通つた場所である、と回想しており、田辺南龍や宝井馬琴を聴いた思い出を記している。落語家を特定の小屋で聴いた記憶については、残念ながら明確な記述が残されていないが、1905（明治38）年の『新潮』に発表された「みづまくら」では、「僕は芝居を見るくらゐなら落語を聞きに行く」と表明して、幾人かの落語家評を記している。その中で漱石が気に入っていたのは『三四郎』でも触れられた三代目の小さんで、「小さんの煙草を呑む稽古の話は、大変面白かつた」と彼の演じた『煙草好き』を評している。ほかにも柳亭燕枝や三遊亭円橋、橘家円喬らについて記しており、とくに円喬はその当時名人と賞された斯道の第一人者であったが、漱石は「世間では円喬を今日の落語家中で白眉だといつて居るそうだが、僕は矢張り小さんの方がうまいと思ふ」として、自身の嗜好では小さんを評価していることを明らかにしている。

このように漱石の創作のバックボーンとして、落語に代表される寄席芸の知識があるのは疑いがない。だが、彼自身は素人落語を演じたわけではないので、アンドロイドに落語を実演させたとしても、デモンストレーション以上の研究材料にはなりにくいと考える。

ところで、筆者は今回の「漱石プロジェクト」への参加が決まって以降に、改めて、漱石と同じく石黒浩教授が作成した米朝アンドロイドによる落語の実演を実見する機会を得た。上演時間は十数分で、落語のいわゆる「マクラ」にあたる小噺をいくつか演じた後、短めのネタである『たけのこ』を演じるというものであった。音声は生前の桂米朝師匠の音源をそのまま使用し、身振りのみが行われるという形である。すなわち、アンドロイドは音声を発することはしていない。

その時に、米朝アンドロイドの落語実演に対して抱いた違和感がある。それは、筆者は実際に生前の米朝師匠の落語に、生ではもちろん、テレビなど映像での視聴まで含めれば、それこそ数えきれないほど接していたので、それと比較すると明らかに異なる点が多く、「再現」といわれると抵抗がある、という点である。アンドロイドによって演じられる落語は、米朝師匠が演じるものとは、所作がやはりどこか違っている。微妙なものかもしれないが、生前の高座姿をよく知る者が見れば、どうしても違っているのである。さすがにアンドロイドといえども、「人間国宝」に認定された名人芸の再現はそう容易ではないように感じられた。

翻って、漱石アンドロイドに話を戻すと、その言動を見た時に、少なくとも現代において「生前の漱石のしぐさとは違う」「生前の漱石の話し方とは異なる」といった違和感を持つ人は、ほばいないと思われる。それだけでも漱石アンドロイドは、余計なストレスを排除して、研究素材として用いるに適しているのではないかと、との印象を持ったことを記しておきたい。

さて、では漱石アンドロイドを、筆者の専門分野から考えてどのように活用するのがよいか。そこで、落語・講談好きな面を漱石の話術の土台として考慮した上で、さきに記したように講演を再現するのが、アンドロイドの活用としては有意義ではないかと考える。1914（大正3）年に学習院で行われた講演「私の個人主義」では、話の前半に落語『目黒のさんま』を話題として持ち出しており、実際に講演でも「落語ネタ」に触れていたことが確かめられる。

なにより漱石の講演記録が残されているのだから、漱石がどのような言葉遣いで、どのような内容を話したのかは確かめられる。その肉付けに、落語などの話芸を参照することである。東京落語の速記本は、漱石が作家として活動していた明治後半から大正期のものが結構残っており、落語全集のような形で刊行されているものも多いので、当時の落語における言葉遣いの特徴を知るのはさほど困難ではない。音声面については、筆者は知識が疎いが、「落語好きの漱石の講演」を再現するなら、間合いの取り方や声の強弱のつけ方など、上手な落語を参考にして「語りの上手な講演」を作ればよいと思われる。この時代の舞台芸能の音源も残されているので、参考にできるだろう。このあたりを反映させた上で講演をアンドロイドに語らせ、聴衆の受け取り方を確認したい。デモンストレーションのみならず、研究への接点としても有意義かつ面白いものになるのではないかと考えている。

「漱石アンドロイド」プロジェクトの 今後の研究活動見込・展望について

二松学舎大学大学院文学研究科

准教授 松本 健太郎



本学のプロジェクトとして制作された「漱石アンドロイド」であるが、メディア論・哲学・現代文化論・コミュニケーション学・芸術学など、いくつかの学問領域の視座に依拠して捉えようとした場合、非常に興味深い題材であると考えられる。以下、現段階で構想しうる研究テーマについて、思いつくものを列挙しておきたい。

①メディア論・哲学的な視座から

石黒浩氏が『人と芸術とアンドロイド——私はなぜロボットを作るのか』のなかで論及されているように、彼がいうところの「ジェミノイド」（特定の人間の模倣的再現を指向して制作されたロボット）は、テレビや携帯電話など、既存のメディアを超える延長作用をもつ可能性があるものといえる。石黒氏が語る「アンドロイドやジェミノイドの研究を通じて私が確信に至ったのは、ロボットがパソコンや携帯電話に続く新しいメディアになる」という言葉は、ロボット技術をメディア論的な視点から再考するうえで示唆的である。

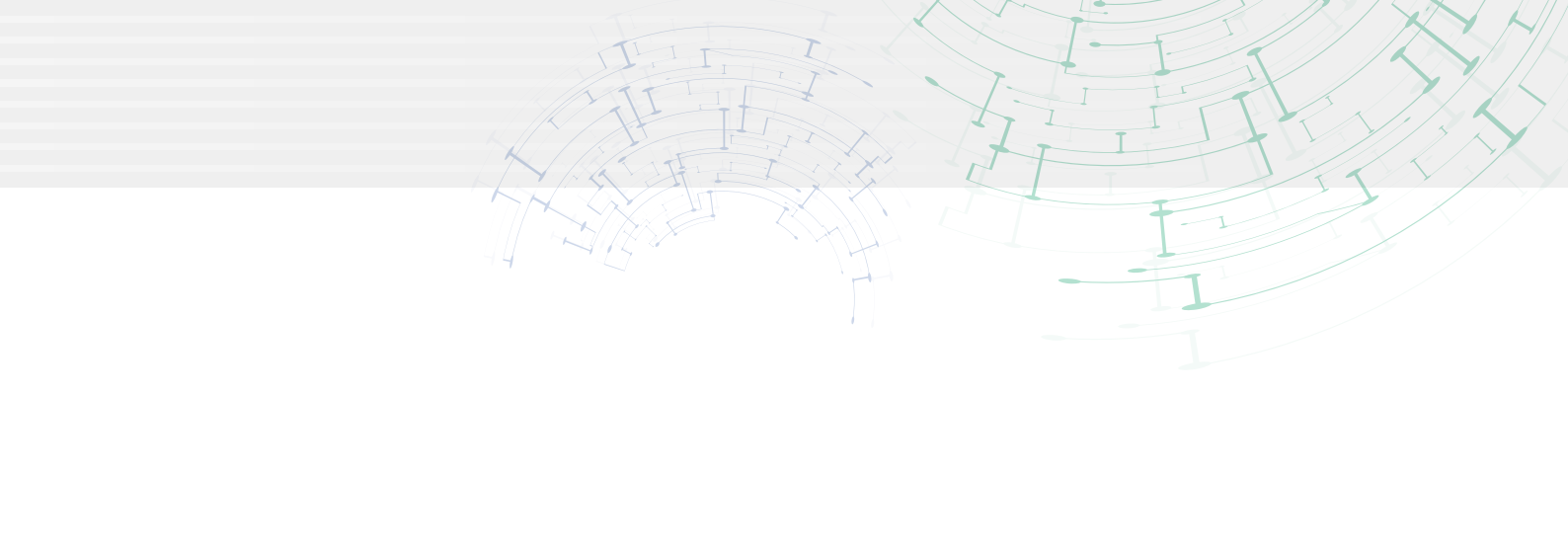
メディア学者として高名なマーシャル・マクルーハンの人間拡張論——メディアは人間を延長する——に準拠するならば、人間とは自らが作りだしたメディアによって作りかえられる存在であるといえるが、近年のロボット技術の発達は、それぞれ、従来のには自明視されてきた「人間」という単位を揺るがしかねないものといえる。

人間を「機械」という観点からとらえる思想の系譜としては、デカルトの動物機械論やラ・メトリの人間機械論などを始めヨーロッパでは長い歴史があるが、近年では、たとえば多種多様なSF作品において、人間と機械との関係性、あるいは、それらの境界線を問う試みが増加しているようにも感じられる（そのなかには、たとえばリドリー・スコット監督の『ブレードランナー』やスティーヴン・スピルバーグ監督の『A.I.』のように、機械はどこまで人間に近づけるのか、という問いを内包しているものもあるし、また、押井守監督の『攻殻機動隊』のように、人間はどこまで機械に近づけるのか、という問いを内包しているものもある）。

昨今さまざまなかたちで展開されるポストヒューマン言説が示唆するように、現代社会はいま、急速に発達するメディア技術との関係のなかで「人間以後」の問いに晒されている。とりわけ人間と機械をめぐる関係性の現在／未来を問ううえで、たんに夏目漱石という存在を「アナログ」的に表象するものというよりは、むしろ（デスマスクや房之介氏の肉声など、複数のデータを組みあわせることにより）その存在を「デジタル」的にシミュレートするものともいえる今回のプロジェクトは、メディア論的な観点からの考察の対象としてとても興味深い。

②現代文化論・コミュニケーション学的な視座から

久保明教が『ロボット人類学——二〇世紀日本の機械と人間』のなかで紹介している言説であるが、米国の人類学者ジェニファー・ロバートソンは、軍事応用を主とする米国のロボット研究と比べて、日本のロボット研究が生活空間で動作するヒューマノイド（人間型ロボット）をより重視してきたことに注目しているという。日本ではロボットが政治的にも肯定的にとらえられてきた歴史があるが、それは彼女によると「第一に、生産人口の減少に対する有効な解決策として、移民を導入することよりも文化的差異が問題にならないロボットによる労働の代替が有望視されてきたこと。第二に、とりわけ家事一般をこなすヒューマノイドが普及することで、単調な家事労働から解放された女性たちがより子供を産むようになり、伝統的な家族形態を再生できると考えられてきたこと。こうした政策的・社会的な要因に加えて、そもそも日本には、ロボットをある種の生き物としてとらえる文化的な背景があると彼女は述べる」（久保, 2015）。その背景にあるものとして、



久保は「生死に関するアニミズム的信念としての『神道』」をあげているが、ともあれ上記の言説が示唆するように、漱石アンドロイドの受容を分析の俎上に載せるにあたって、それをとりまいている日本文化に特有のコード／コンテキストの差異を考慮する必要があることは言を俟たない。これは、現代文化論的もしくはコミュニケーション学的な研究の題材になりうるものといえる。

③芸術学・教育的な視座から

大阪大学出版会から刊行された『ロボット演劇』には、劇作家の平田オリザ氏と石黒氏を中心とする企画として、ロボットwakamaruを役者として起用した芝居の上演が紹介されている。この文理融合の実践例ともいえる試みは、本学が今後、漱石アンドロイドの活用方法を模索するにあたって、モデルとすべき事例なのではないかと考えられる（アンドロイド×アート）。じっさい、石黒氏は『人と芸術とアンドロイド』のなかで「技術」と「芸術」の関係性に触れているが、本学でも文学部として、それらの間隙に目を向けていくことは重要と思われる。

「今後の研究活動見込・展望」ということから離れて、「教育」に関する話題になるため詳述することは避けるが、今後ありうるアプローチとしては、アクティブラーニングおよびPBLの理念に即して、また、「漱石アンドロイド」を主人公に据えて、学生をまきこんだプロジェクトを模索することが有意義なのではないかと考えられる。たとえば二〇一六年度に映像メディアゼミナールの学生が中心となって倉敷市で上演した体感型ゲームなどは、学生を含めおおくの人々の支持や関心を集めるという点では、面白い切り口になるかもしれない。

「文学的心理学」の構築に向けて

二松学舎大学文学部
専任講師 荒井 裕樹



1

アンドロイド研究は、物理的な装置をいかに「人らしく」作り上げるかという段階から、「人は、どのような点において、機械的構築物を“人らしい”と感じるのか。そもそも「人らしさ」とは何か?」といった、社会心理学的な段階へと進んでいる。

本プロジェクトも、これから実用段階へと移行するにあたり、大学の教育現場において、アンドロイドがいかに受容されるのかという観点から、様々なデータが蓄積されていくだろう。

そこでわたくしは、社会心理学的な見地とは別の観点から、本プロジェクトの活用可能性について考えてみたい。あえて言うならば、「文化心理学的」あるいは「文学的心理学」というような見地である。

2

優れた文学作品や舞台芸術を見ていると、登場人物に現実的な親近感を覚えることがある。舞台に立つ役者の声が、冒頭は「ああ、あの俳優らしい声だな」と聴いていたものが、そのうちに俳優の個性や固有名が背景に退いて、役名の人物が（もちろん虚構の人物である）、実際の生活の中にもおかしくないような感覚を覚えるのである。

小説や舞台の登場人物は、当然のことながらフィクションの産物である。しかし、そのフィクションがフィクションを超えて、「その人らしい」感覚を観る者に、あるいは読む者に迫ってくることがある。私たちは、たとえば有名なアニメのキャラクター（たとえば「ドラえもん」の登場人物たち）を現実の人間に重ね合わせて、「あのキャラみたいな人」という形で、フィクショナルな存在を、現実の存在に重ね合わせて類型化したり分類したりすることがある。こういった場合の、「その人の、その人らしさ」とはいったい何であるのか？ 人は、何をもって「その人らしい」と感じるのだろうか？

3

わたくしを含めて、いま生存している者の中に、夏目金之助と「夏目漱石」と実際に接した経験のある人間はいない。体格・皮膚感・声の質など、実際にその目で、五感で感じ取った者はいない。しかしながら、わたしたちは「漱石らしさ」のようなものを、この文化の中に暗黙の裡に共有しているようにも思われる。その「漱石らしさ」とは何なのか？ どのような形で作られているのか？について考えなければならない。

そこで本プロジェクトでも、たとえば夏目漱石に影響を受けた小説家などに漱石アンドロイドと対面していただき、ご自身が築き上げてきた「漱石イメージ」との相違点について率直に語っていただき、わたしたちの中に共有されている「無意識の文化の中の漱石」を掘り起こす作業を進めていく必要があるのではないかと。

あるいは、このような言い方をしてもよい。わたしたちが抱く「漱石イメージ」は、やはり、彼が残した小説から形成されている部分が多い。人は虚構の産物である小説から、どのような「作家イメージ」を膨らませていくのかについて考える。さらに言えば、小説家は、そのような「作家イメージ」を読者にふくらませるような仕掛けを、意識的に小説の中に埋め込むのだろうか？ だとしたら、小説という文学作品の中に、人の心理に作用するような仕掛けが（意図的にせよ、そうでないにせよ）含まれているということになる。

そういった点なども、本プロジェクトが今後解明すべき課題であるように思われる。

漱石アンドロイドの活用について

二松学舎大学大学院文学研究科

教授 田中 正樹



これまでの文献、事跡中心の研究方法に対し、身体性を有するアンドロイドを活用した研究として考えられるのは、まず音声を利用した方法である。田中の専門である中国学・漢学との関連でいえば、漱石の青年期、及び修善寺大患後晩年に至る時期に特に個人的な営みとして実践していた漢詩作成が扱い得るテーマとなる。

漱石の小説をはじめ著作に見える中国歴代の漢詩がどのように発話され音読されてきたのか、また晩年の未定稿としての漢詩は、実際どのように訓読され、音読されたのか、について、たとえば詩吟との関係から考えることができよう。

従って、文字でかかれたテキストとしての「漢詩」―漱石が取り上げた歴代の漢詩及び漱石自身の漢詩―がどのように漱石によって読まれ、また彼の著作に活かされ利用されたかという問題と、音声を伴った「読み」（訓読）と「詠み」（吟詠・詩）が漱石にとってどのようなものとしてあったのかという問題の両方から検討できる。

例えば、当時の漢詩の吟詠の在り方を参考に、漱石アンドロイドに実際に吟詠させる試み―単に発話させるのではなく節回しを付けて謡わせる―などが、現在のプログラムで可能かどうか検証するなどが、先ず考えられる。これは明治から大正期の漢詩の受容としての詩吟の問題としても主題化できると思われる。



二松學舎大學
NISHOGAKUSHA UNIVERSITY



大阪大学
OSAKA UNIVERSITY

学校法人二松學舎

〒102-8336 東京都千代田区三番町6番地16 TEL 03-3261-7407